

第3章

園児の理解に基づいた「環境を通して行う教育及び保育」実践事例

第3章では、第1章、第2章の基本的な考え方やポイントなどを基に行われている「環境を通して行う教育及び保育」の実践事例について紹介しています。

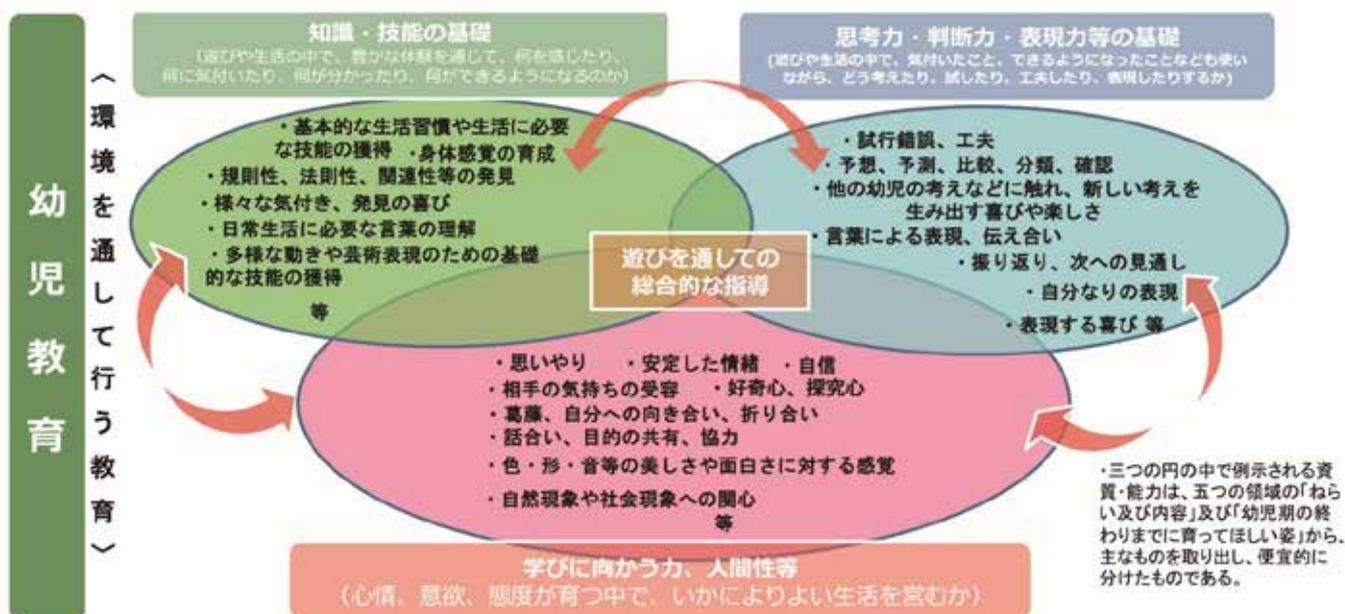
それぞれの実践事例において、園児の遊びの姿や園児の理解、保育教諭等が行う環境の構成や援助など「環境を通して行う教育及び保育」を展開していく上で、大切にしていきたいことを記載しています。

教育及び保育において育みたい資質・能力に示されている事項を思い浮かべ、重ね合わせながら読んでいただくことで、遊びを通して園児たちがどのようなことを体験し、どのようなことが育まれているのかなどを理解することにもつながっていくのではないのでしょうか。園児の理解に基づいて環境を構成し、教育及び保育の中で育みたい資質・能力を育ていけるよう、様々な園で行われている実践を参考にしてください。

なお、本資料に掲載したものはあくまでも一つの実践事例です。各園においては、質の高い教育及び保育を提供していくための取組について、日常的に意識し、考えていくことが大切です。園や地域の実態に応じて本資料を活用しながら、更に充実した教育及び保育を進めていただくことを期待しています。

幼保連携型認定こども園の教育及び保育において育みたい資質・能力

下に示す資質・能力は例示であり、遊びを通しての総合的な指導を通じて育成される。



第3章に掲載されている事例

事例1	「森におばけがいるよ！」	人的環境としての保育教諭等の役割を意識し、遊びの中で大切にしたい体験に応じて、環境を構成する
事例2	「お団子屋さん、やりたいな」	作ったもので遊ぶ楽しさが感じられるよう、園児のイメージが実現できるような教材を提示する
事例3	「園内を撮影して動くコースを作ろう」	園児の興味や関心、欲求に応じて環境を構成する (ICTを活用した環境の構成)
事例4	「ここにおばけの家を作ろう」「家ってドアあるやんな？」	園児が生み出す活動の展開に応じて環境を工夫する
事例5	「花びらが浮かんだよ」	園児がやりたいと思ったことが実現できるような環境を構成する
事例6	「これはカレー」「私はオムライス」「こっちはジュースね」	園児の実態から園児に体験してほしい内容を考え直し、体験してほしい内容にふさわしい環境を構成する
事例7	「本物みたいなゴムボールを作りたい」	友達関係の深まりを見通しながら、現在の園児にとって必要な環境を構成する
事例8	「チョウチョに蜜を飲ませてあげよう」	園児の生活や遊びの動線を考慮し、遊びが広がる場の設定を工夫する
事例9	「今日は、ドングリごはんです」「案山子ってなあに？」	園外での活動を教育及び保育に取り入れたり、園外の環境を生かしたりしながら、園児が豊かな生活体験を得られるような環境を構成する
事例10	「あのとき作った、動く車を作ろうよ」	教材のもつ教育的及び保育的な価値と園児の実態とのバランスを考慮しながら教材を提示する
事例11	「ただいま」「おかえり」	一日を通した生活の流れを意識し、園児の実態に応じた環境を構成する
事例12	「飛び出す絵本、明日作ろうね」	教育課程に係る教育時間後の遊びと、次の日の教育課程に係る教育時間の遊びがつながるよう、提示する教材を工夫する
事例13	「いつの間にか、みんなと同じだね」	経験が異なる園児がいる3歳児の生活に配慮し、園児同士の自然な関わりにつながるような遊びを取り入れたり、遊びの場を構成したりする

事例1「森におばけがいるよ！」

(3歳児が自分なりにイメージをもち、表出して遊べるようになった時期)

人的環境としての保育教諭等の役割を意識し、 遊びの中で大切にしたい体験に応じて、環境を構成する

3歳児の頃は、人的環境である保育教諭等の存在が大きく、保育教諭等と一緒に活動することで、安心して活動に取り組みたり、活動の幅が広がったりする園児も多くいます。また、3歳児は、他の園児と遊んでいても、一人一人が個々にイメージをもって楽しんでいることも多い時期です。保育教諭等は、それぞれのイメージを大切にしながらも、中継点となって園児同士をつなぎ、皆で楽しんだという感覚がもてるようにすることが大切です。

事例は、広い園庭と園庭の中に森があるという特徴をもった園です。その特徴的な園庭の自然の中で、園児が諸感覚を使い、自然物などを見付けたり、見付けたものに関心をもち「何だろう」と不思議に思ったりする体験ができるようにしたいと願っています。また、自然は豊かにイメージを膨らませてくれます。保育教諭等は自然と様々な形で出会うことができるように、自然物と園児をつないでいく必要があります。そのためにイメージを広げるきっかけになるようなものを用意することも大切です。

園庭の環境と園児の遊び

園庭の隅には「夢の森」と呼んでいる木が茂った一角がある。以前から、「森探検」と称して、園児と担任でその一角を探索していた。大人にとっては木の隙間から園庭も見通せる小さな森なのだが、3歳児にとっては、暗くて奥深い大きな森だと感じるようで、探検していても「魔女がいる」「イノシシがいる」などイメージが膨らむ場所である。

10月、運動会后、いつものように森探検をしている最中、枯れた枝が垂れ下がった木を見付け「コウモリみたい」、節が目のように見える木を見て「目の木怖い」と言い始める。それがきっかけになり、園児たちは「森の中におばけがいる」というイメージをもち始めた。それから、毎日のように園児たちは、森探検に出掛けた。

遊びの様子

この日も朝からA児に促され、担任と8人の園児で森に行く。

B児が「この木はおばけにとげとげにされちゃったんだ」と、とげがある木を見付け指差す。担任は「そうなの？おばけのせいなのね。怖いね」と応える。B児が「とげがあるから、この木はとげとげの木」と言うと、それを聞いていたC児は「この木はおばけにコブを付けられた」と言った。担任は「じゃあこの木は、コブの木かな？」と応える。

D児は、木に付いている傷が顔に見えた様子で「見て！この木、ペンギンの顔に見える」と言った。するとE児が「この木はペンギンの木」と言う。そばにいたF児は、同じ木を指差して「ウサギに見える。ウサギの木じゃない？」と聞いた。担任は「そうだね。ウサギにも見えるかな？ペンギンの木にしようかな？ウサギの木にしようかな？」と応える。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の思い

一人の園児の「おばけ」というイメージが、周囲の園児に派生して、木の特徴に気付き始めました。担任がそれを受け止め、言葉にして返したことで、そばにいた他の園児もそれぞれ口々に様々なイメージから木に名前を付ける様子が見られました。

でも、そのイメージは共有されているものではなく、同じ木を見て違う名前を付ける園児も見られます。担任が焦って「共有されれば面白い遊びになりそうだ」と思い、まとめたり決めたりするのではなく、今はそれぞれの園児が自分のイメージで楽しむことを大切に作る時期ではないかと考え、丁寧に園児一人一人のイメージを受け止め返していくことにしました。

園児の理解を基にした環境の構成と園児の姿

担任は、園児一人一人が探検隊になりきって森探検を楽しめるように、トイレットペーパーの芯とリボンテープを用意しておいた。園児は、トイレットペーパーの穴をのぞいて、望遠鏡にしたり、2つくっ付けて双眼鏡を作ったりし、それを誇らしげに胸に下げて、森探検をする姿が見られるようになった。そのうち、おばけと戦うための武器を作ったり、採った草花を入れるバッグを持ったりして森探検を楽しむ姿も見られるようになった。

その後の遊びの様子

1月になったある日、森探検の中で、突然B児が「先生、おばけが木に悪いことするのはお腹が空いてるからじゃないかな？」と言った。担任は「お腹が空いちゃうと悪いことしちゃうの？」と聞いた。B児が「だからさ、おばけが悪いことしないように、おばけの好きなものをあげるといいんじゃない？」と言うと、そばにいた園児たちは「そうだよ」と口々に賛同する。担任が「おばけの好きなものってなあに？」と聞くと、園児たちは「お菓子とか？」「アイスクリームかな」「ゼリー」などと、それぞれ自分が好きなものを言う。

担任の保育教諭の思い

保育
教諭

園児のイメージが、違う方向に広がってきました。このイメージを聞き流してしまってもいいのか、実際にお菓子などを置いてみた方がいいのか……。担任は、この園児たちのイメージにどこまで添ったらいいのかと悩みました。でも、ここまで園児が楽しく遊んできたので、園児のイメージを受け止めてみることにしました。

翌日、担任はカップのゼリーを用意し、園児たちと森へ出掛けると、一番太い木の下に置くことにした。園児たちは近くにある花や草を摘んできて一緒に置いた。

その日の園児が帰った後、担任は、ゼリーを食べ、空っぽのカップを同じ木の下に置いておいた。

次の日の朝一番に森に行った園児が、「先生大変、ゼリーがなくなってる！」と報告したことで、保育室中は大興奮となった。担任が「みんなで森に行ってみる？」と言うと、園児たちは「行く、行く」と言い、10人以上でぞろぞろと森へ行った。園児たちは「ゼリーがなくなってる！」「おばけが食べたんだ」「おばけはこれで悪いことしなくなるね」「今日もあげたらいいよ」「今日は、あそこになってるミカンを置いたらどう？」「ぼくはチクチク（松の葉）を置いてみる。きっとおばけ怖がるよ」などと口々に話した。

今まで、それほど森探検に興味をもっていなかった園児たちも加わって、森のおばけの存在は、園児の中で大きなものとなっていきました。ゼリーだけでなく、森の中にある様々な自然物を置いてみるという遊びにも広がっていきました。

この遊びは、10月から3月まで続きましたが、その中で、園児のイメージは少しずつ共有されていきました。担任の保育教諭がまとめようとしなくても、次第にそれぞれの木は同じ名前と呼ばれるようになっていきました。担任の保育教諭は、この遊びの経過を絵本にまとめ保育室に置き、園児が見ることができるようにしました。

事例から読み取れること

【保育教諭等の存在が心のよりどころとなるようにする】

- 3歳児にとっては、担任である保育教諭との信頼関係を築くことが何より大切です。様々なものに取り組もうとするとき、何かあったら助けに来てくれるだろうと、安全基地として担任の保育教諭がいるからこそ、思う存分活動に取り組むことができるのです。中には、お化けを見に行きたい気持ちはあっても、ちょっと森は怖いと思っている園児もいたかもしれませんが、大好きな担任の保育教諭がいてくれることで安心感をもつことができました。そして、担任の保育教諭と自分たちで作ったイメージの世界を共有することを楽しみました。この活動を通して、より信頼関係が深まったとも言えます。保育教諭等は、園児にとって大切な人的環境です。

【園の中にある様々な環境を生かす】

- 園によって、どのような場所にあるか、どのような立地条件にあるかなどは様々です。それぞれの園の特徴を生かした活動を取り入れていきたいものです。この事例は「夢の森」という豊かな自然がある園です。その豊かな自然環境を生かした活動を取り入れていきます。では、園庭が小さな園でこのような活動は望めないかということ、そんなことはありません。小さな自然物でも、不思議に感じたり、何かに気付いたり、発見したりすることは可能と言えます。今ある園の環境の特徴を生かすと同時に、その園ごとに工夫して園児たちが充実した活動ができるようにしていくことが大切です。

【自然物と園児をつないでいく】

- 園児の周囲に自然物があればそれでよいということではありません。保育教諭等は、その自然物と園児をつなぐことが必要です。例えば、園児が木を様々に見立てていますが、保育教諭等がそれを受け止め、園児に返していくことで、園児はもう一度木をよく見て考えます。この繰り返しの中で、園児は更に深く自然と関わっていくのです。

【イメージが膨らむようなものを用意する】

- 担任の保育教諭は、「園児がよりなりきって探検を楽しめるように、望遠鏡や双眼鏡があったら楽しいのではないか」と考え、トイレットペーパーの芯、リボンテープなどを用意しました。これによって、より園児のイメージは具体的になり、森探検が更に楽しいものになりました。また、担任の保育教諭は、どこまで園児のイメージに寄り添うべきか悩みましたが、ゼリーを用意したり、それを空っぽにしたものを置いておいたりなど、園児たちが喜ぶ演出もしてみました。それによって、園児の森への興味や関心はさらに深まっていきました。

【園児一人一人のイメージを大切にする】

同じイメージがもてれば、もっと楽しく遊べるのではないかと考え、思わず一つのイメージにまとめたくなることもあります。しかし、3歳児の頃は、複数の園児が同じ場において同じ遊びをしていても相互に関わりをもたずに遊んでいるなど、一緒に遊んでいるように見えても一人一人のイメージは異なっている時期です。一人一人が自分なりのイメージをもち、それを表出しながら楽しく遊ぶことを保障していくことを大切にしたい時期と言えるでしょう。園児一人一人のイメージを受け止めながら、イメージが広がるように働きかけていくことが必要となるでしょう。

【保育教諭等が橋渡しをしながら、他の園児のイメージに触れられるようにする】

保育教諭等はそれぞれのイメージを受け止め、言葉に表して返していく中で、周囲の園児に聞こえるようにしたり、巻き込んだりしながら、他の園児のイメージに触れられるようにしていくことも大切です。それが刺激となり、イメージが膨らんでいくこともあります。また、そのことが、園児同士の自然なやり取りにもつながっていきます。

【「皆で楽しんだ」という感覚がもてるようにする】

園児同士でイメージを共有しながら遊ぶことは、まだ難しい3歳児ですが、保育教諭等が橋渡しをする中で、ゆるやかな一つのイメージの中で遊ぶ姿が見られることもあるでしょう。

事例では、「森におばけがいること」「おばけが木にいたずらをして木がとげとげになったり、コブができたなど特徴的になってしまうこと」「おばけは置かれたものが好きなこと」など、園児たちの中で共有されていることがありました。しかし、イメージは一人一人違っていました。その中でも、皆で森探検をしたり、お供えをしたりすることで、「皆で遊んだ、楽しかった」と思えることが大切です。これが、今後、イメージを共有しながら遊ぶことの素地になっていくのです。

【3歳児なりに遊びを振り返ることができるようにする】

楽しい遊びを振り返ることができるような環境をつくっていくことも必要です。今回の事例では、3歳児ということもあり、「ゆめのもりのひみつ」という絵本を作ってみました。園児はその絵本が大好きで、よく見ています。これも、「皆で楽しんだ」という感覚をもつための一つの材料になっていくと考えられます。

事例2「お団子屋さん、やりたいな」

(イメージを実現しながら、本物らしく作ることを楽しむようになる時期)

作ったもので遊ぶ楽しさが感じられるよう、 園児のイメージが実現できるような教材を提示する

保育教諭等が、園児一人一人の思いを受け止め言葉にしていくことで、園児のイメージが膨らんだり、友達に伝わりやすくなったりします。友達との伝え合いによって、さらに新たなイメージが生まれることもあるでしょう。

5歳児の頃には、これまでの様々な教材との出会いを基盤としながらも、新たに園児がイメージしたものを本物らしく作れるような素材や材料を提示したり、園児と共に考えたりしていくことも大切です。保育教諭等は、自分たちで遊びを進めていく姿を見守り、必要な環境を見極めながら提示していくなど、5歳児の発達に応じながら環境を用意していきたいものです。

遊びの様子

A児は空き箱をつなげてお団子屋さんの屋台を作っていた。屋台は素朴な形だが、看板に「うまいよ！みたらし団子」「オススメ、あんこ団子」などと書かれていて、お団子屋さんのイメージをもっていることが伝わってきた。紙を丸く切り、茶色の画用紙を貼って作ったお団子からも、平面ではあるが「みたらし団子」のイメージが伝わってきた。

すると、興味をもったB児が「僕も入れて」と一緒に紙のお団子を作り始めた。空き箱で作った屋台がお団子屋さんの遊びの場になっていたが、担任は、園児たちが動きやすい広さと、もっとお店らしい場ができることで、更にイメージが膨らむのではないかと考え、遊びの場を作るための大型積み木・衝立・段ボールの仕切りを提示した。そして、必要な物をすぐに作れるよう、紙類・フェルトペン・折り紙・セロハンテープなどの材料を準備した。

翌日も二人はお団子屋さんを始める。担任は「大型積み木を使ってお店を作るとどうかな？」とつぶやいてみる。A児は「そうだね。B君、お店から作ろうよ」とB児を誘う。B児も「いいよ。お団子を売る所と、作る所があるといいよね？」A児「そうだね！『お団子ください』ってお客さんが買う場所が必要だよ。お客さんが並んじゃったらどうする？」と、考えたことを互いに伝え合っていた。担任も大型積み木を使って一緒に場を作る。お店ができると、二人はお客さんが並ぶことを予想してチケットやお金を作り始めた。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の願い・環境の構成

保育
教諭

本物らしい「お団子」が作れることで、自分が考えたことや気付いたことを言葉にして相手に伝えることがより楽しくなるのではないかと考えて作ったもので遊ぶ楽しさや、思いを出し合いながら遊ぶ楽しさを十分感じてほしい。



○お団子屋さんのお場やお団子さんに必要なチケットやお金作りをしていた。明日は、「自分が考えたこと・イメージしたこと」が表現できるように本物らしいお団子が作れる素材を用意してみよう。

- ・本物らしいお団子が作れるような、紙粘土・竹串・手拭き・お団子を置くままごとの皿などを準備しておこう。
- ・友達と一緒に団子を作る場として、テーブル・椅子を人数に応じて出すようにしよう。

遊びの様子

二人は、登園するとすぐに大型積み木でお団子屋さんのお場を作り始めた。A児が「先生、今日もお団子屋さんやるからね」と伝える。担任は、二人に「今日は、お団子作るかな？本当のお団子みたいに粘土でお団子を作ってみる？」と聞き、用意しておいた紙粘土と竹串を見せる。二人は、「作る、作る！棒（竹串）もあるんだね」と紙粘土と竹串を見て嬉しそうな表情をする。担任は「この粘土は、だんだん固まってきて、色も塗れるよ」と話す。

A児とB児は「見て、見て、丸い形のお団子になった！」「ぼくのはちょっと長い丸になっちゃったよ」と会話を楽しみながらお団子を作っている。作りながら、「みたらし団子とか、海苔の団子とか作らないと！」と自分の思い付いたことも言葉にして伝える姿が見られた。すると、A児は「私はあんこの団子を作るね！」と言い、串に刺した団子にのせる「あんこ」をどう作るか、考えていた。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の願い・環境の構成

保育
教諭

○A児とB児は、自分が話したことを聞いてもらう嬉しさや、友達の話を聞いて、また自分の考えたことを言葉にすることを繰り返す中で、お互いにイメージを出し合いながら遊び、思いが伝わると「嬉しい！」「面白い！」と感じている様子であった。

○自分たちの思いを出し合いながら、本物らしく作る嬉しさや工夫して作る楽しさを味わってほしい。

今日、園児が考えていた、みたらし団子やあんこの団子、海苔の団子がより本物らしくできるような材料を用意しておき、遊びの様子を見ながら提示していくようにしよう。

遊びの様子

次の日、担任は、お団子屋さんのお遊びが続いていくか様子を見ながら、あんこ作り用に（接着剤＋絵の具）、海苔の団子用に（のり＋黒いクレープ紙）、みたらし団子作り用に（ペン＋セロハン）など、本物らしく作って遊ぶことができる素材や材料を用意しておいた。また、乾燥させるためのお皿・筆・手拭きなども準備しておいた。

登園すると、A児、B児はお団子作りを始めた。「お団子を作りたい」という意欲から、自分たちで材料を用意して作り始めた。

本物らしく作るために担任が提案した「みたらし団子」「海苔の団子」のタレや海苔などを、どんなふうにつけたら本物らしくなるのかなどを個々に試しながら、作り始める。あんこの団子、海苔の団子ができてくると、さらに園児たちは「大福を作ろう」と言い始め、自分たちでお団子よりも大きな球体を作りながら、「大福」を作り始めた。

事例から読み取れること

【園児のイメージしたことが実現できる素材や材料を用意する】

初めは、空き箱で作ったお店と、紙で作った平面のお団子を使っていましたが、担任の保育教諭は、より本物らしいお店の空間やお団子を作ることが、遊びがさらに発展していくことや園児のイメージの実現につながることを予想し、様々な環境を構成しました。それが、園児の「本物らしく作ってみたい」という思いと重なったため、お団子屋さんは楽しい遊びへと展開していきました。また、接着剤を筆を使って塗ることや紙粘土を小さく丸めてお団子を作るなどの細かい作業工程も、5歳児の園児の実態に合っていたと言えます。園児の実態や遊びの展開に応じて、イメージを実現していくことができるような素材や材料を提示していくことが大切です。

【園児の必要感に応じて、園児の実態に応じた教材を提示する】

○担任の保育教諭は、園児が思い描いた「みたらし団子」「あんこの団子」「海苔団子」などがより本物らしく、そして自分たちで作れるような材料を、遊びの様子に応じて提示していきました。園児がいよいよ「お団子を作ろう」というタイミングで紙粘土を提示したり、後から、みたらしに使う材料を提示したりしています。一つ一つの体験を楽しみ、園児の必要感に応じながら、教材を提示していくことが、園児にとって「自分たちで考えて、作っている」体験につながっていったと言えます。

【保育教諭等の思い(意図)と園児のやってみようことを考慮する】

○保育教諭等の思い(意図)と、園児のやってみようことを考慮しながら、必要な環境を用意していくことが大切です。その際に、保育教諭等の思いや願いが大きくなってしまい、園児の思いとずれてしまうと、「保育教諭等のしたいことを園児がしている」ことになってしまいます。常に、園児の興味や関心は何か、園児自身が「やりたい!」と思っていることは何かを考え、保育教諭等の意図と園児の思いを織り交ぜて成長に必要な体験ができるようにしていくことが大切です。

【遊びの援助者としての保育教諭等の役割】

○5歳児であっても、進級当初には、園児も新しい環境に慣れるまで時間が必要です。また、年長児としての生活は、初めは保育教諭等と一緒に遊んだり生活したりしながら築いていきます。事例では、遊びを通して、保育教諭等が遊びの場を一緒に作ったり、新

しい素材を提示したりしています。また、思ったことを言葉にして伝える嬉しさや伝わった嬉しさを感じられるように、園児の思いを受け止めています。保育教諭等自身が遊びを楽しんだり、園児の思いを受け止めたりしていくことで、園児と保育教諭等との信頼関係も育まれていきます。

事例3「園内を撮影して動くコースを作ろう」 (5歳児が遊び込む楽しさを感じてほしい時期)

園児の興味や関心、欲求に応じて環境を構成する(ICTを活用した環境の構成)

園児の興味や関心に応じた環境を構成していく際には、保育教諭等のねらいや園児に体験してほしいことなどの意図を環境に入れ込みながら構成していきます。そのことはとても重要なことですが、保育教諭等の意図が強くなりすぎると、園児の興味や関心を受け止められなかったり、園児が自ら試したり、工夫したりできる環境ではなくなってしまう可能性が生じます。

園児が遊びの何を楽しんでいるのか、遊びの中で何を実現させたいと考えているのかなどを保育教諭等が読み取り、保育教諭等が体験してほしいと思っている意図とのバランスをとりながら環境を構成していく必要があります。

園児の姿と担任の保育教諭の思い

1学期は年長になったという意識があまり感じられず、遊びもバラバラに取り組んでいることが多くあった今年の年長児。2学期の生活が始まり、担任はできるだけ園児一人一人の声を聞きながら、どこかで年長児になったという意識がもてるような遊びができないかとその機会を探っていました。

そのようなときに、園児たちから、車を運転するゲームを作りたいという声が出てきました。園児たちのイメージは、テレビゲームではなく、家族と一緒に買った買い物先のゲームコーナーにあるような車のゲームを再現したい様子でした。

遊びの様子

担任が段ボールを出し、運転席をイメージできる仕切りができると、そこから園児たちが車のハンドルや椅子を作り出した。ハンドルも、より本物に近付けるために、いろいろ形を工夫し、何度も作り直し、椅子に座ったときに本物のゲームコーナーで車を運転しているようなハンドルを作ることができた。

さらに、アクセルとブレーキも必要という考えが生まれ、牛乳パックでどのようにしたらより本物らしくなるかなどを確かめながら、試行錯誤する姿が見られた。

車のゲームは園児たちにもイメージしやすいのか、いろいろな園児が興味をもち始めた。

車の横にはゲームボックスが置かれ、空き箱を使ってゲームを始めるためのコイン入れと、そこに入れるコインも作られた。コインを入れる場所と、コインを回収する場所を、何度も試しながら作っていく様子が見られた。

ところが、ゲームの全体像がほぼ完成してくると、実際にゲームをするのに、絵を描いた画面では、動きがないから面白くないことに気付いた園児があり、遊んでいた園児たちは大きな問題にぶつかることになった。

園児たちから「テレビがあればいいのに」という声が出た。担任は園児たちの仲間に入り、一緒に絵が動く方法を話し合ってみて考えたが、どうしても動画でない面白くないという結論になった。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の願い・環境の構成

園児たちは、自分たちが考えたゲームに必要なものを次々に作り、イメージしたものを形にすることを楽しんでいる。

動くコースにしたい、より本物らしくしたいと思っている。



保育教諭

- ・本物のように動くコースを作るためにはどのような環境があればよいのだろう。
- ・園児たちには、遊び込む楽しさを感じてほしい。
- ・プロジェクターとスクリーン、そしてパソコンを用意してみよう。

担任の保育教諭は、遊びのイメージが「ゲーム」であったことから、どこまで遊びに取り入れていってよいのかという迷いもありました。しかし、園児たちが、より本物らしく、イメージを形にしていくことを楽しんでいる姿を捉え、考えを実現していく楽しさや、試行錯誤しながら本物らしくするための方法を考えたいと思いました。そして、園児同士が考えを出し合ったり助け合ったりしながら遊びを進めていってほしいという願いをもち、プロジェクターとスクリーン、パソコンを用意して、園児たちの作ったゲーム機の前に動画を再生することにしました。

遊びの様子

園児たちは大喜びで、映像に合わせてハンドルやアクセルやブレーキを上手に操作しながら遊び始めた。さらに、ゲームの途中に出てくる「はてなボックス」を、実際に保育室の上から箱を吊るし、その箱をジャンプして叩くと、中からいろいろなものが出てきてそれが得点になるなど、遊びが面白くなる方法を皆で決める姿も見られた。

ゲームの映像を使ってしばらく楽しんだ後、園児たちから「自分たちでコースを作りたい」という声が上がった。担任は、園児たちが自分たちで園内の様子を撮影し、その映像をプロジェクターで流すことができるよう、援助をしながら一緒に遊びを進めていった。

園児たちがカメラを持って園内を様々に動き撮影し、その映像を担任が編集して園内のコースを作ると、ゲームの中では、まるで園内を車で走行しているような感覚を味わうことができた。

映像の途中で出てくる「はてなボックス」は、その度に、運転者が保育室から吊るしてある箱をジャンプして叩き、そこから出てきたグッズによって、点数が決まっていくというルールになっていた。そのため、ゲームを始める前に、箱にグッズを用意する係が必要になった。また、映像の中で、がたがた道と決めた場所では、運転している人の椅子を揺らすため、背後から椅子を揺らす役も必要になった。

さらに、ゲームの勝敗を決めるために、点数を記録する係や、点数を表示する係など、友達との中で自然に自分の役割をもちながら遊ぶようになり、学級全体でこの遊びに思いを込めながら遊びを進めていく姿が見られるようになった。

事例から読み取れること

【園児の興味を受け止め、興味や関心に応じた遊びを提示する】

教育及び保育の中で、テレビゲームを再現するような遊びは避けたいと思ってしまうこともあります。その一方で、この事例では、遊びのイメージが、誰もが知っているゲームであったことにより、友達と共通のイメージをもちやすく、興味や関心をもち、学級の皆に受け入れられる魅力のある遊びとなりました。また、そのことが、様々な発想や意見の広がり、工夫しながら自分たちで遊びを進めていく姿にもつながっていきました。

保育教諭等が園児の思っていることや感じていることをしっかりと受け止めながら興味や関心を把握し、興味や関心に応じた遊びを提示したり環境を構成したりしていくことが大切です。

【園児の興味や関心に応じて、遊びに使う教材や遊びの場などを工夫する】

園児の実態に応じた環境を構成していくためには、保育教諭等が園児をいかに理解するかが重要です。園児がやってみたいと思っているイメージをきちんと受け止め、園児の気持ちに寄り添いながら、実態を捉えた上で、イメージが実現できるような環境の構成や援助をしていくことが大切です。そのことが、園児が試行錯誤しながら、自分たちの遊びを作り上げていくことにつながっていきます。

【環境の一部である保育教諭等が活動の理解者や共同作業者となり一緒に遊ぶ】

この事例では、担任の保育教諭が園児の興味や関心に寄り添いながら園児の姿を理解しようとしたことで、担任の保育教諭と園児たちとの信頼関係が一層深まりました。さらに、担任の保育教諭が園児の仲間となり一緒に遊びを進めていくことで、遊びが園児にとって魅力的なものになっていきました。

【園児が体験することを考慮し、情報機器の使い方を工夫する】

園児たちが、遊びの中で学びを深めるために、絵本や図鑑だけでなく、映像を取り入れる可能性も大きいことが実感できました。園児の興味や関心に応じて、映像を使用したことで、更に興味や関心が広がり、園児がよりやってみたいという思いをもちながら、自分たちから環境に関わって遊ぶ姿が見られるようになりました。

これからの時代を見据えて教育及び保育の環境を考えると、パソコン、プロジェクターなどといった情報機器を、園児の実態に応じて工夫しながら環境に取り込んでいくことで、園児たちの遊びの広がりや豊かな生活体験につながっていくと言えます。

情報機器自体に関心を示す園児もいることが予想されます。情報機器は、園児たちが使い方を理解することで、機材を自由に使い出すことも可能となります。

しかし、園児たちが主体的に環境と関わって遊び出すためには、情報機器からの映像だけでなく、実際の世界との関わりが大事です。幼児期の教育は、直接的・具体的な体験を重視していることを十分に意識しながら環境を構成していくことが必要です。園児たちの興味に応じて、どのように情報機器と出会ったり、教育及び保育の中に取り入れたりとっていくかを十分に考慮していくことが求められます。

事例4 「ここにおばけの家を作ろう」「家ってドアあるやんな？」 (自分のもつイメージを表現しながら友達とのやり取りを楽しむ時期)

園児が生み出す活動の展開に応じて環境を工夫する

園児が環境と主体的に関わり生き生きとした活動を展開するために、園児の遊んでいる姿からその遊びが充実したものとなるよう、どんなことをしたいのか感じ取り、それを手掛かりとして、園児の期待や意欲を生み出せるような環境の構成をすることが大切です。

園児が環境に関わる姿から何に関心を抱いているか、何に意欲的に取り組んでいるか、取り組もうとしているか、遊ぶ姿を振り返ることで、園児の気付きや発想を大切にすることができます。

保育教諭等だけでなく園児自身も必要な状況を生み出すことができるよう、教材の工夫を図ったり、また園児の作り出した場の見立て、工夫などを取り上げたりしながら、どのように環境を構成していくのかを保育教諭等が常に意識し、関わっていくことが重要です。

遊びの様子

自分の好きな動物作り

4歳児の園児たちが、積み木と動物の玩具を使って、友達と動物園作りや動物園ごっこをして楽しんでいた。動物の玩具は数も種類も限られていたので、取り合いになり、「ウサギはないの？」と好きな動物がないことに不満を感じるA児。

すると、画用紙やペンが用意されている製作コーナーへ向かい、自分の好きなウサギを作り始めた。A児は形に沿って切り、積み木の所へ持って行って遊び出した。それを見ていたB児は、「それ自分で作ったの？私も作りたい！」と、興味をもち、画用紙とペンを使って、自分なりの動物を作る姿が見られた。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の思い・翌日の環境の構成

自分が遊びに使う物を自分で作ろうとする姿が見られる。



自分たちで作った動物を使ってごっこ遊びをするなど、「好きな動物がないから自分で作ろう」と考えた園児の姿に、担任の保育教諭は嬉しく思いました。

2学期に入り、自分の好きな遊びを見付け、友達関係も少しずつ深まってきましたが、限られた特定の友達のみとの関わりや、自分の思いを言葉で伝えるということが苦手な園児が多く見られていたため、担任の保育教諭は、遊びを通してその園児なりに自分の思いを伝え、自分のもつイメージを表現しながら、友達とやり取りをする楽しさを感じてほしいとねらいをもちました。そして、友達とのやり取りやごっこ遊びが、より楽しめるようにペープサートを作ればどうかと考えました。

製作コーナーに、新たに、割り箸と様々な大きさの色画用紙を用意しました。遊びのきっかけになればと思い、事前に担任の保育教諭が作っておいたペープサートを、さり気なく置いておきました。

また、担任の保育教諭は、劇場ごっこにも発展していくかもしれないと予想し、環境として、段ボールで作った舞台を用意しました。まだ、自分たちで作ることは難しいと捉え、あらかじめ用意しておくことにしました。

翌日の遊びの様子

ペープサートでお話ごっこ

翌日、動物を作っていたA児が、机に置かれた担任が作ったペープサートに気付いた。早速、画用紙で作った動物を割り箸に貼り、ペープサートを作る。

出来上がったペープサートを友達に見せ「こんにちは！」「ぴょんぴょん！」と簡単なやり取り遊びが始まった。

担任が「ここでも遊べるよ！」と段ボールで作った舞台へ誘いかけると、そこでやり取りを楽しむ姿が見られた。園児同士のやり取りを見守りながら、担任が舞台上に家を作って貼ると、「お家に帰らないと！」「ただいまー！」等、役割に応じた言葉のやり取りへと変化が見られていった。ままごとやブロックなどの他の遊びで遊んでいた園児も興味をもち、ペープサートを作る園児が増えた。その中に、おばけのペープサートを作った園児がおり、驚かしたり逃げたり隠れたりなど言葉や動きのやり取りを友達と楽しむようになった。そのやり取りを楽しむ中で、「もっと隠れる場所いるな！」「作ろう！」「木とか？」「草もいるんちゃう？」と草や木、おばけの家などペープサートだけでなく、人形舞台の道具作りを楽しむ姿が見られるようになった。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の思い・環境の構成

ペープサート作りや舞台作りの中で、友達と「ここにおばけの家を作ろう！」「家ってドアいるやんな？」などと、少しずつ自分のイメージを表現するようになった。

言葉のやり取りをしながら動かす楽しさ、役を演じることを楽しむ姿が見られるようになった。

画用紙だけでなく、割り箸やカラービニール紐等の様々な素材を使って製作を楽しむ姿も多く見られるようになった。



担任の保育教諭は、その姿から、園児が必要とするであろう遊びに必要なものをイメージしながら、園児が素材を選択しながら遊べるよう、扱いやすい小さめの段ボールや厚紙、セロハン紙、トイレットペーパーの芯などの様々な素材を更に用意しました。

次の日の遊びの様子

これも作ろう！

引き続き、ペープサート作りや舞台作りが盛り上がり、ペープサートを使って劇場遊びを楽しむ姿が見られた。ペープサートのやり取りを重ねていくうちに、ごっこ遊びの内容にも変化が見られた。「園にいきます」「いってらっしゃい」というペープサートのやり取りを楽しむ中で、『園がない』ことに気づき、「じゃあ、作ろう！」と、“園作り”へと遊びが変化していった。担任が事前に用意していた段ボールや厚紙などの素材を使って、「ここは、れもん組にしよう！」「園やったら時計もいるやんな？」と話しながら、園児が見立てた園にあるものや園バスも作る姿が見られた。

継続的に遊ぶ中で、新たに作るものの幅も広がり、家やお風呂なども作り出した。「先生、鏡作りたいねんけど、キラキラの紙ってある？」と必要なものを担任に求める姿があり、実現したいイメージを明確にして遊ぶ姿も見られた。

事例から読み取れること

【園児が生み出す遊びの展開に応じて必要な物や場、遊び方などを提示する】

好きな動物がないことに不満を感じた園児が、画用紙で動物を作ったことがきっかけで始まった遊びですが、このときの園児の姿を振り返り、ペープサートへの展開を期待しました。またペープサートを用いて、遊びを通して友達とのやり取りを楽しんでほしいという願いを込めて、翌日の環境を用意しました。担任の保育教諭が事前に作ったペープサートをさりげなく置いておいたことも、園児がペープサートを作ってみようというきっかけになったと考えられます。

また、ペープサートを使ってどのような遊びが展開されていくのかを担任の保育教諭が予想し、遊ぶ場を事前に作っておいたことが遊びを広げていくきっかけとなりました。

「何があれば自分で作ることを楽しむことができるのか」「ものを使ってどのような遊びができるのか」「保育教諭等の援助が必要なところはどこか」など、園児の手先の技術、扱える材料や用具、遊びの中で楽しんでいることなどを踏まえ、遊びの展開を予想しながら環境の構成をしていくことが大切です。

【園児の発想やイメージが実現できるような環境を構成する】

保育教諭等は常に園児が遊ぶ姿から、園児が何に興味や関心をもっていったのかを振り返ることが大切です。園児の場の見立てや発想や工夫を大切に「もっとこうしたい！」「こうしたら面白いかも！」ということを取り上げて、遊びの面白さを十分に引き出し、イメージしたことが実現できるように、園児の実態に即した扱いやすい素材を用意していくことが大切です。

【園児の興味や関心と、保育教諭等が体験してほしいことを、重ね合わせながら環境を構成する】

2学期に入り、園児一人一人が自分のやりたい遊びを見つけて、安定して遊ぶようになっていたということが、友達に関心を向けて、友達のしていることを真似してペープサートを作る遊びに広がっていた要因の一つではないかとも考えられます。それに加えて、製作コーナーの場の作り方が、友達のしていることが見えやすい場になっていたことも、友達に関心をもつことにつながったのではないのでしょうか。

園児の興味や関心は時期によって異なり、一人一人の発達にとって意味のある環境かどうか求められます。環境は固定的なものではなく、柔軟に環境を再構成し続けることが大切です。環境は園児と共に構成していくものです。一方的な保育教諭等の思いだけでなく、園児の興味や関心、発達に合った援助や保育教諭等の体験してほしいという願いを環境に組み込んでいき、その環境が、保育教諭等が考えた、園児たちに体験してほしいことが可能となる環境となっているのかを、常に見直し関わっていくことが重要です。

【保育教諭等や友達など、人的環境の大切さ】

保育教諭等と園児との信頼関係を築き、保育教諭等に見守られている安心感の下、園児は一人一人がもっている力を十分に発揮し、友達との関わりを広げ、深めていくようになります。また、友達の姿を取り上げることで刺激を受け、そのことを自分の遊びに取り入れようとしたり、挑戦する意欲につながっていったりします。

保育教諭等との信頼関係が教育及び保育の基盤となっていることを意識し、園児と保育教諭等との信頼関係を築いていくことが重要であると言えます。

事例5「花びらが浮かんだよ」

(身近な環境に興味をもち、やってみたい、試してみたいという姿が見られるようになってきた時期)

園児がやりたいと思ったことが実現できるような環境を構成する

園児が不思議に感じたことを、他の園児たちとも共有しながら活動を広げたり、伝わりやすいように援助したりすることで、興味の継続や遊びの広がりにもつながっていきます。

園児たちの興味の広がりを意識しながら、園児の言葉を受け止め、今園児が何を考え、何に興味をもっているのかなどの捉えを基に、園児たちが試してみたいことをすぐにできる環境や、やりたいと思ったことが実現できる環境を工夫しながら構成していくことが大切です。

園内の環境の構成

前の年の秋に、『春の花が咲く時期に、色水遊びなどの豊かな活動につながれば』と思い、園児たちと園庭にたくさんの球根や種を植えた。様々な色の花が咲くようにバランスを考え、花びらの色が水に溶けやすい花や匂いがよい花など、多くの活動につながるように想定した。また、園児たちのより豊かな発想力や自由な表現が促されるような製作ができる、廃材コーナーや素材、教材コーナーを常設している。

移動式のワゴンもあり、様々な種類の素材や用具を入れ、保育室で製作遊びなどが充実するよう、興味に沿った素材や材料を置く場を設け、園児たちがやりたいと思ったときに材料を使って遊ぶことができるよう、工夫している。

遊びの様子

4月、園庭の花々や桜の花が咲き出す。次第に桜の花びらが散り、たくさん落ち始めた。担任は、園庭に落ちている桜の花びらを見て「きれい！飾りたい」という園児の声が聞こえたため、透明なコップを用意し、花びらがよく見えるようにした。その状況を見て、花びらを拾い、コップに浮かべて飾る園児の姿があった。

しばらくすると、水の色が変わっていることに気付いた園児がいた。色水に興味をもった園児がいたため、水と花びらを入れることができる透明なペットボトルを用意した。ペットボトルに花びらを入れ、色が変わるのを待っていたが、最初浮いていた花びらが、一日で沈んだことを不思議に感じ、「なんで沈んだのだろう？」と、園児たちの興味は、色から“浮く・沈む”に移っていった。

色水遊びに展開していくと考えていた遊びが、園児の興味から、浮く・沈むに広がり始めたため、担任は、この後遊びがどのように広がっていくのか、どのような環境を構成していく必要があるのかを考えた。

そして、園児は何を感じ、どのようにしたいと思っているのか、園児たちの思いを確認できるよう、園児たちの言葉をよく聞いてみるのが大事だと考えた。

集まりの時間に、遊んだことを伝え合う機会をつくると、花びらに興味をもっている園児が、不思議に思ったことを発表した。すると、同じ疑問をもっていた仲間がいたことが分かったり、他の園児たちも興味をもち始めたりした。

園児同士で、「違う花びらや他のものだと沈まないのでは？」という話が出たため、試してみようと、園庭に常設しているタライに水を張ることにした。

園児たちは、様々な身の回りのものをタライに入れ、浮くものと沈むものがあることを発見したり、時間によって変化するかを確認したりしていた。

毎日、園児同士で、それぞれの発見や考えを言葉で伝え合っている姿も見られた。

保育室には、集まったときや園児たちと相談などをする際に使えるよう、ホワイトボードを置いている。また、園児たちが必要なときに使うことができるよう、模造紙を準備している。

担任は、園児たちとホワイトボードや模造紙に、浮いたものと沈んだもの、それぞれの文字や絵を描き、貼り出していくと、興味をもつ園児が増えていった。

担任の保育教諭の願いと環境の構成

多くの園児たちが興味をもつ中で、自分なりに不思議に感じることを見付けたり、不思議だなと思ったことを試したりやってみたりしてほしい。

保育
教諭

担任の保育教諭は、園児の興味の広がりにつながっていくよう、園児たちが色々な角度から観察できるタライに代わる容器はないか、思わず身近にあるものを入れて試したくなるような容器としての教材があれば、より興味が広がるのではないかと考えました。

そして、浮いたり沈んだりする様子が色々な角度から見える透明な水槽を用意しました。

遊びの様子

園児たちは、各々気になるものを水槽の中に入れ、浮くか沈むかを観察し、楽しんでいった。また、試した結果を引き続き、模造紙に描き出していた。

家のお風呂でも試していることを担任に伝える園児もいた。

ある日、様々なものを試していると、水が入っていないペットボトルは浮くが、水を入れたペットボトルは沈むことを発見した園児がいた。

少し経つと、浮く・沈むに興味をもつ中で、「船を作りたい」という声上がるようになり、園児たちは、廃材を利用し、製作した船をタライに浮かべる姿が見られるようになった。しかし、なかなか上手く進まず、壊れたり、沈んだり、安定しなかったりしていた。その中で、安定して上手に進む船を作ることができる友達の姿を見て真似たり教え合ったりしながら、楽しんでいる姿があった。また、様々な材料を使いながら、浮きやすい材料、壊れやすい材料、沈んでしまう材料などを試しながら、船作りに適した材料を友達同士で見付けながら作る姿も見られた。

様々な廃材を試していく中、たくさんのペットボトルを家から持ってくる園児がいたこともあり、安定して浮くペットボトルを使う姿が増えていった。そして、これまでの様々な試しから発見した、水に入れても壊れない材料や浮く材料などを選んで、組み合わせて使用しながら船を作って遊ぶ姿が見られるようになった。

担任の保育教諭は、園児たちの浮かぶということへの興味が、船作りにまでつながる姿を見て、園児たちの気付きや探究心の大事さを改めて感じました。

事例から読み取れること

【園児たちが試してみたいと思ったことをすぐに実現できるような環境を構成する】

園児たちは遊びの中から、様々なことに気付いたり発見したりすることを楽しんでいきます。また、気付いたことを基に「なぜ」や「どうして」などと感じている園児の姿も多く見られます。園児たちが不思議に感じたことや考えたこと、試したくなったことなどを、やってみたいと思ったときにすぐに素材や遊具などを使いながら実現していくことができるよう、保育室に園児が扱いやすい教材を取り出しやすいように保育教諭等が考えながら整えておくことが大切です。

豊かな素材や材料等の環境を構成することでより創造力が磨かれていきます。しかし、いつも整えられた環境の中から材料を選ぶだけではなく、園児自らが必要な材料を見付けていくことの大切さも大事にしていきたいものです。

【園児たちの発見や試しにつながるよう、見通しをもって園内の環境を構成する】

○偶発的な発見や不思議だと思うことは、至るところにあります。そのような偶然の発見から、園児たちが試してみたいくなるような事柄に出会うことも多くあります。偶発的な発見が起こった際には、共感し、より考えを深められるような言葉を掛けていくことが大事であり、それが、学びをより深められるきっかけにつながっていくでしょう。しかし、園児たちの発見や不思議だと感じるようなことは、単に待っているだけではなく、園児の姿や遊びの内容などについて、長期的な見通しをもち、計画的に豊かな環境を整えていくことで得られるということ意識していくことも大切です。

【保育教諭等が園児たちの思いや言葉を丁寧に聞きながら遊びを深めていく】

○活動のきっかけや遊びの発展につなげていくためにも、園児が興味をもったことやつぶやいた言葉などを聞き逃さないことが大切です。また、園児たちからの質問や、やりたい思いに対し、すぐに答えを出したり、先回りし過ぎたりせず、園児たちが自ら考えたり試したりする過程を大切にすることが、園児たちの深い学びの機会となっていきます。

○気付いたことや考えたことを、他の園児にも知らせるようにしていくことで、興味が他児へと広がっていくことがあります。また、友達と考えを共有していくことによって、様々な考えが生まれ、友達の言葉を聞きながら、新たな気付きや考え方が深まっていくこともあるでしょう。そのために保育教諭等は、園児の考えを受け止めながら、友達と考えを共有することが可能となるような援助をしていくことも大切であると言えます。

事例6 「これはカレー」「私はオムライス」「こっちはジュースね」 (園児一人一人が自分なりのイメージをもちながら遊びを十分に楽しんでほしい時期)

園児の実態から園児に体験してほしい内容を考え直し、 体験してほしい内容にふさわしい環境を構成する

園児が周囲の環境に関わり、遊びを楽しめるよう、教材や用具の提示の仕方を工夫し、園児が自ら関わるような環境を構成していくことが重要です。また、好奇心を抱き遊び込む過程で、自分なりの考えを遊びに反映できるような教材の準備や環境の構成を工夫することが大切です。行動範囲や動線、遊びの広がりなど、園児の活動の流れを考慮し教材や用具の配置、提示の仕方などの工夫をしていくことが必要です。

園庭の環境の構成

4歳児・9月、園庭の藤棚の下の砂場は日差しを避けて遊ぶ場所として、園児たちには人気の場所となっている。担任の保育教諭は、砂場でのレストランごっこ等への発展を予想し、テーブル1台、砂場用のままごと用具、スコップ、安全を確認した家庭用の調理器具などを準備する。

遊びの様子

園庭のわきを通して登園した園児が、砂場の環境の構成に気付き、外遊びが始まると同時に数名の園児が早速砂場で遊び始める。様々なままごとの容器に砂を入れ、型を取って皿に乗せ、担任にケーキやオムレツができたと言って持ってくる。

担任は「おいしい」と言って食べる真似をして、園児に返していたが、数回繰り返すと、園児たちは、鬼ごっこや固定遊具などの遊びに移行してしまい砂場遊びは終了となった。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の思い

園児は、砂場での遊びの中で、砂で作ったものをケーキやオムレツなど、食べ物に見立てて遊ぶことを楽しんでいる。

すぐに違う遊びに興味が移る様子が多く見られる。

保育教諭

- 砂場を中心として、園庭全体の環境を活用しながら、砂場での遊びがレストランごっこやお店ごっこに広がったり、そこから園児同士の関わりも生まれやすくなるかもしれないと思っていた。
- 砂場での遊びは担任が予想していたほど楽しんでいないのではないかと。

担任の保育教諭は、自分の予想していた姿とは違う園児の姿が見られたことについて、先輩の保育教諭に相談してみました。

<先輩の保育教諭のアドバイス>

今の園児の実態には、教材や用具の内容や設定が物足りなかったのかもしれないね。もう少し具体的にレストランをイメージできる教材や用具を準備してみてもどうか。

先輩
保育
教諭

担任の保育教諭は、アドバイスを基に、遊びの中で何を体験してほしいのかをもう一度考えてみることにしました。

遊びの中で体験してほしいことを考える

保育
教諭

今の園児の実態から考えると、遊びの中で、自然物などの様々な材料を使い、見立てて遊ぶ楽しさを感じてほしい。レストランごっこやお店ごっこなど、自分のイメージした遊びを楽しんでほしい。遊びを通して、友達や担任と簡単なやり取りをすることの楽しさを感じてほしい。

その日、担任の保育教諭は、園児が砂場で遊ぶ姿を想像しながら、砂場遊びを発展させていくとしたら、どのような教材があれば、園児に体験してほしいことが実現できるかを考え、環境を準備しました。

次の日の環境の構成

前日と同じ砂場の教材、用具に加え、ペットボトル、惣菜用空パックや紙コップを準備しておく。また遊びに使ってもよい、園庭の花壇の草花を摘んでいくつかの小さなかごに入れておく。水もバケツに入れて準備した。レストランをイメージできる環境として、砂場のわきにいくつかのテーブルとベンチを準備し、わきに調理場用のテーブルを設定し、調理器具や皿などの器を並べておいた。

次の日の遊びの様子

昨日、砂場遊びをしていた数名の園児が遊び始める。担任も仲間に入りながら、型で抜いた砂の上に花を飾り付けたり、パックに盛り付けたりしながら遊んだ。園児たちは、それぞれイメージした料理を作りテーブルに並べると、「これはカレー」「私はオムライス」「こっちはジュースね」などと、担任に自分が作ったメニューを次々と言葉に出して伝えていた。それを見ていた園児がお客さんとしてやって来ると、注文や受注の会話を始めた。数名の園児は、コックさんやウエイトレスなどの役になり、それぞれが自分の動きを楽しみながら、遊びを進める姿が見られた。

そばで三輪車遊びをしていた男児は、三輪車のかごにパックに入った料理を入れると、デリバリーだと言いながら運んで行った。

園児たちはそれぞれのイメージや見立てで、砂場遊びを楽しむ姿が見られた。

事例から読み取れること

【園児の実態に応じて教材や遊びの場を工夫したり変化させたりする】

○担任の保育教諭は、いつもの砂場遊びの用具だけでは、遊びを発展させる面白さを味わえない園児もいることに気がきました。また、園児の実態や体験してほしい内容に応じた教材や用具を準備することの大切さにも気付き、先輩の保育教諭のアドバイスを基に、さらに数種類の教材を準備しました。草花や空きパックなどを準備したことで、食材やお弁当をイメージしたり、調理することをイメージしたりできるようになり、遊びの発展にもつながっていきました。

【体験してほしい内容に応じて、用具の数や遊ぶ場所の調整をする】

○前日に1台しか準備しなかったテーブルを、遊びの範囲と園児の動線を考慮し、テーブルと椅子を複数台準備したことで、園児の興味を引き出し自ら環境に関わる姿やレストランやデリバリーなどをイメージしながら遊びを楽しむ姿につながっていきました。また、教材の内容や提示の工夫をしていくことで、料理のメニューやレストランで働く人の役割など、園児一人一人が自分のイメージや体験したことがあることを再現しながら遊び、楽しむ姿が見られるようになりました。

砂場での遊びを通して、食材として活用できる草花や様々な用具を使い、園児一人一人が工夫しながら、料理を作ることを楽しむ姿が見られました。

「園児一人一人が自分のしたい遊びを十分に楽しめるように園児の興味に応じて必要な教材や用具を準備する」「準備した教材や用具、材料などを活用できるテーブルなどを園児と一緒に配置する」「一人一人が十分に使うことができるよう、教材や材料の量や、用具の数を工夫する」など、園児が自分なりの遊びや友達との関わりを楽しみ、満足感を味わうことができるような環境を構成していくことが大切です。

【保育教諭等と園児一人一人との触れ合いや関わりを大切にする】

○担任の保育教諭が、園児一人一人がイメージしたメニューを共有し、園児が自分の考えで作り出す喜びを感じられるように関わったことで、より遊びを楽しむことにつながっていきました。お客さん役やデリバリーの配達員など、園児たちは、一人一人のしたいことや遊びのイメージを表現しながら遊びを楽しむ姿が見られました。今後は、必要に応じて仲立ちをすることで、友達のしていることにより興味をもったり友達と関わることの楽しさを感じたりする体験につながるよう、援助していくことが考えられます。

○環境の一部である保育教諭等は、園児一人一人のつぶやきや思いを丁寧に捉え共感しながら関わり、安心して遊びに取り組める雰囲気や状況を作っていくことも大切な役割です。

事例7「本物みたいなゴムボールを作りたい」

(園児が友達とイメージを共有し、思いの実現に向けて試行錯誤しながら活動する時期)

友達関係の深まりを見通しながら、現在の園児にとって必要な環境を構成する

園児が、友達と関わりながら思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、試行錯誤しながらも充実感をもって遊びや活動に向かえるよう、環境を工夫しながら構成し、必要な体験が得られるような状況を作っていくことが重要です。保育教諭等は園児の姿から、発達の状況や取組の様子などを、十分理解した上で環境を構成していく必要があります。一方で、保育教諭等の考えと園児の思いや気付きとのバランスが難しく、より適切な援助を心掛けたいところです。そのためにも職員同士が連携することも大切なことのひとつです。

5歳児になると友達との関係も深まり、相談したり考えを出し合ったりしながら遊びを進めていく姿も見られるようになってきます。そこには以前の体験を基にした、園児の考えも聞かれることでしょう。そのような姿を大切に、保育教諭等は園児の考えを受け止めながら、気持ちの伝え方や行動の仕方など、園児一人一人の姿を十分に捉え、理解し、一人一人に合った援助をしていくことが大切です。園児一人一人の育ちが、学級としての育ちにもつながっていきます。

園や園児たちの遊びの状況

11月中旬の秋祭りウィークで5歳児が縁日を出し、小さい組の園児たちが買いに来ることになった。担任の保育教諭は、園児の「小さい組の子たちに楽しんでもらいたい」という意欲の高まりを期待し、友達と関わりながら思いを共有し、試行錯誤を体験しながらも充実感を味わってほしいと願い、5、6人の少人数のグループで取り組むことを提案した。園児たちとの相談の結果、あるグループでは、ゴムボールすくいをやることになった。

保育室の環境の構成

「作ったもので遊び、遊ぶと作り替える」など、遊び方や作り方を工夫したり、新しく必要になったものを作ったりするなど、作ることと遊ぶことが循環するように、保育室内には常に、空き箱や紙、季節の自然素材などが用意してある。また、園児が椅子に座り、机でじっくり物作りができるような環境も構成している。

遊びの様子

園児たちは、初めは新聞紙を丸めてボールにしていた。やがて「弾まない」「水に沈んじゃう」という不満がA児やB児から出てきた。「どうやったら弾んで水に浮くボールになるんだろう」と、園児の言動を受けて担任がきっかけを作ったことから、本物らしいゴムボール(水に浮いて弾むもの)を作ることが園児たちの間で共通の目的になった。担任は、園児たちがどのような素材でボールを作ることにするのか、様子を見守ることにした。

三日経った頃、園児たちはアルミホイルでボール作りを試みていた。今度は水に浮くけれど弾まないということに気づき、試行錯誤を繰り返していた（試行錯誤は一週間程度続く）。すると、C児が思い出したように「前作った、ネバネバの塊みたいなもので作ればいいんじゃない？」と提案した。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の願い

C児は以前、教育課程に係る教育時間後の教育及び保育の中で、科学図鑑に出てくる粘り気のある塊の遊具（手作りスライム玩具）で遊んだことを思い出し、そこからゴムボール作りを連想したのだろう。

また、担任の保育教諭は、日頃からC児の姿を、自分の思いのままに遊びを進めてしまう傾向があり、友達との関係性を築くことが難しいことがあると捉えていました。そこで、C児のこれまでに体験したことを生かした発想が、友達との取組で生かされるよい機会となるのではないかと考えました。さらにそのことで、C児と他児との関係がより応答的なものに変化することを願い援助を考えました。



C児が考えたことが周囲の園児たちにも伝わることで、友達と一緒に試して遊ぶ楽しさを感じたり、他の園児がC児の発想の面白さに気付いたりすることができるよう、これまでの体験を生かしたC児の思いを、より丁寧に周囲の園児に伝えていくことにしよう。

保育
教諭

遊びの様子

C児は、自分の家で保護者と一緒に「ゴムボール作りには塩と水と洗濯糊が適している」と調べてきた。担任は、C児の考えや行動がグループの他の園児にも伝わるよう、丁寧に援助した。他の園児もC児の考えを受け入れ、考えを思い付いたC児の姿を認める姿も見られた。そして、グループの友達同士で相談し、翌日園でやってみることになった。

しかし、原料である塩と水と洗濯糊などのそれぞれの割合が難しく、なかなか固まらなかったこともあり、C児は自分のペースで、どんどん分量を変えてゴムボール作りを繰り返した。友達の発言を聞かずに続けるので、自分本位なC児に対して周囲の園児たちから不満が出てきた。

担任は、前向きになりかけていたC児と周囲の園児との関係が、再び否定的なものになるのではないかと心配になったため、C児の試したいという気持ちを認めながらも、友達と一緒に進めていることや、友達の考えを聞いてみることの必要性などを伝えた。

また、5歳児の園児たちにとって、原料の割合を導き出すことが、どこまで可能なのかと悩み、先輩の保育教諭である副担任と相談し、なるべく園児の自発性や試行錯誤を許容しつつも、ここでは原料の割合について、副担任が調べたものを園児たちに情報提供することにした。副担任からの情報提供を受け入れた園児たちは、適した硬さと弾力性をもったゴムボールを作ることに成功し、追求していた本物らしい水に浮いて弾むゴムボールを作ることができた。

そしてその後は、ボールをより本物らしくするために、どのように色を付けるのか試行錯誤を続けることになった。A児、B児、C児はプリンカップの内側にマジックで色を付け、そこでボールを成形したり、D児、E児は成形時に絵の具を混ぜ込むというやり方を試みたりなど、グループの友達同士で考えを伝え合いながら遊ぶ姿が見られた。

園児の理解と担任の保育教諭の思い

担任はこの遊びを通して、イメージの実現に向けて友達同士で考えを出し合いながら自分たちの力で進めていこうとする園児の育ちを確認することができ、とても嬉しく感じました。

また、C児が以前の体験を基に、ゴムボール作りに使用する材料を連想したことに、体験の積み重ねの大切さと、様々なことに気付いたり感じたりする日々の生活の豊かさが重要だと改めて感じました。

一方で悩ましかったのは、園児たち自身の問題解決に、保育教諭等がどこまで援助をするのかということでした。今回は原料の割合を、副担任が提案することになりましたが、園児たちは、それまでの間に自分たちで十分試行錯誤を続けていたこともあり、この提案を受け入れていたようでした。

遊びの様子

秋祭りでは、ゴムボールすくい屋は賑わいを見せた。3歳児が遊びに来ようになると「ボールが小さいと口に入れて飲み込んでしまうかもしれないので危ない」などの声が園児から出て、自分たちでボールの大きさを工夫してみるなど、さらに相手の状況に応じて、遊びに必要なものを変化させようとしていった。

事例から読み取れること

【園児たちが思いを共有し、友達と協力して取り組めるような状況をつくり出す】

「弾んで浮くゴムボールを作る」という遊びの目的をもち、それが友達との間で共通になっていたため、園児たちは共通の目的に向けて友達と協力しながら取り組むことにつながったと考えられます。

また、話し合いをするグループを、5、6人の少人数のグループで行ったことも、自分の考えを相手に伝えやすく、友達の考えも聞きやすい、伝え合いが可能となるような人数であり、共通の目的を意識しやすくなるような人数であったと言えます。

そのため、試行錯誤しながらも園児同士が、自分たちで取り組んでいこうとする姿につながったのではないのでしょうか。友達との関係性やその場の雰囲気や状況も、教育及び保育の環境の一部です。園児たちの友達関係を的確に把握し、発達に応じてグループを構成していくなど、活動の形態を考えていくことも大切です。

- 5歳児の後半頃は、友達同士の関係性も深まっていく時期です。しかし、全ての園児が同じように、友達との関わり方を見せるわけではありません。相手の気持ちや行動に気付いたり、相手の考えを聞こうとしたりする意識をもつことの大切さを保育教諭等が知らせていくことも大切です。友達と協力することの大切さや友達がいるよさなどを十分に感じていくことで、少しずつ友達同士で考えを出し合いながら自分たちの力で進めていこうとする姿が見られるようになっていくでしょう。

【園児の体験は相互に結び付いていることを意識し、体験の質を考えて環境を構成する】

園児たちが主体性を発揮しながら、試行錯誤し、友達とイメージを共有しながら遊ぶ姿は、この時期までに、遊びの中で様々な素材に触れてきたことや、友達と考えを伝え合いながら遊ぶことを体験してきたことが要因となっているとも考えられます。

「これまでの体験が、次の体験に生かされる」という体験の関連性の中で、園児たちが様々な工夫しながら遊びを進めていけるよう、日々、どのような体験が必要なのかを、「あることを体験することにより、それが園児自身の内面の成長につながっていく」ということを考慮しながら、環境の構成を考えていくことが大切です。

【園児の発達を理解し、園児たちの追求したいことに沿った環境を構成する】

この時期には、より本物らしさを追求するという姿も園児の発達の姿として理解する必要があります。水に浮いて弾むゴムボールを作りたいという思いが共通の目的となったのは、その表れと言えます。園児の発達を理解していくことが、取組の方向性をある程度予測させてくれるのではないのでしょうか。この事例では、園児自身の発想から、より本物らしいものを以前の体験を生かしながら作るようになりました。保育教諭等が園児と活動を共にしながら環境を工夫して構成する上で、園児の思い付きやひらめきが大切にされることも重要です。

【試行錯誤ができるよう、園児が選んで使える多様な素材・材料を日常的に用意したり、提示する場を工夫したりする】

事例では、園児たちがゴムボールを作る際、身近な素材で作ったが上手くいかず、違う素材で繰り返しやり直すという試行錯誤が見られました。日頃の教育及び保育で、園児が試したり工夫したりすることが可能となるよう、園児が選んで使える多様な素材・材料が、いつでも園児自身で手に取ることができる環境として構成されていることが大切です。

また、「遊ぶ」と「作る」が循環することで、作ったものをすぐに試したりイメージに応じて作り替えたりすることもできるようになります。材料を提示することとともに、作ったものを試すことができる機会や場をどこにどのように作っていくのかも重要であると言えます。

【保育教諭等自身も時には悩み、園児と共に試行錯誤しながら援助の方向性を考える】

担任の保育教諭は、原料の割合を導き出す際、最後まで園児たちの試行錯誤を見守るか、担任の保育教諭が伝えるのか悩みました。この事例では、先輩の保育教諭である副担任と相談しながら、園児たちが試行錯誤を限界まで続けている姿を考慮したり、そこを越えてしまうと友達との人間関係が再び上手くいかなくなってしまうことなどを予想したりしました。そして、園児たちが自ら受け入れてくれることを期待して、副担任から原料の割合を提案することになりました。

保育教諭等の役割には、園児の姿を信じて見守ること、必要に応じてヒントを伝えていくこと、一緒に考えながら方向性を示していくことなど、様々な援助がありますが、園児の理解を基に、「今園児たちにとって必要な援助は何か」を考えていくことが重要であると言えます。その際には、他の職員の考えを聞きながら多面的に園児を理解したり援助の仕方を検討したりするなど、職員同士で語り合いながら検討していくことも大切です。

事例8「チョウチョに蜜を飲ませてあげよう」

(一人一人が安心して自分のやりたい遊びを楽しむようになってきた時期)

園児の生活や遊びの動線を考慮し、遊びが広がる場の設定を工夫する

園児のイメージにふさわしい遊びの展開を保育教諭等が予想しながら、育ててほしい方向性に合う体験ができるよう、園児の生活や遊びの動線、何をどこにどのように提示していくのか等を、人や物、場や空間など、様々なことを関連させながら環境を構成し、園児にとって必要な体験ができるよう、状況をつくり出していくことが大切です。保育教諭等も環境の一部であることを意識しながら、一人一人に丁寧に援助をしていきましょう。

園児の実態

A児は、入園前は家庭で保護者と一緒に過ごしていた。入園当初は、保護者と離れることが不安で登園時に泣くことが続いたが、2週目になり、担任の保育教諭のそばにすることで、泣かずに過ごすことができるようになってきた。学級の園児たちは、他の園から入園してきた園児、進級した園児、家庭で生活してきた園児と様々だが、少しずつ自分のやりたい遊びを見付け始めている。

本日の環境の構成

園児たちが安心して遊びを見付けることができるよう、保育室内に、ままごと遊び、ブロックや電車の玩具、粘土遊び、製作遊び、絵本などの場を構成する。

製作遊びができる場には、紙を丸めた棒に、チョウチョの塗り絵をセロハンテープで付けるとチョウチョのペープサートが簡単にできる材料を準備しておいた。

遊びの場面

A児は担任の隣で、周囲の園児の様子をじっと見ていた。

「Aちゃんもやってみる？」と誘ってみるが、首を振ってやろうとしなかった。室内にいる園児たちが「先生、私のチョウチョができた!」「先生、見て見て」とチョウチョを作り、担任に見せに来る。その様子に興味をもちながらじっと見ていたA児は、担任の手を握るとチョウチョ作りの材料が置いてある場に歩いて行った。担任は、A児がチョウチョを作りたいと考え、言葉を掛けながら丁寧に関わり、A児と一緒にチョウチョを作った。すると、先にチョウチョを作っていた園児たちが、ままごと遊びで使っているキッチンの所へチョウチョを飛ばしながら持って行き、食べ物の玩具を使ってご飯を作り、「チョウチョさん、ご飯だよー」などと言いながら遊び始める。A児はその様子を見ていたが、小さな声で「チョウチョはお花の蜜が好きなんだよ」と担任につぶやいた。

遊びの場面

B児、C児は進級児で園内の環境もよく知っている園児である。保育室の中で、電車の玩具を使って走らせて遊んだり、ブロック遊びをしたりなど、自分のやりたい遊びを楽しんでいた。すると、ブロックで作った剣を持ち保育室の中を二人で走りながら追いかっこを始めた。担任は危険だと思い「Bちゃん、Cちゃんお部屋の中は歩いてね」と声を掛けた。

B児とC児は走ることはやめたが、その後は、歩き回りながら周囲で遊んでいる園児の所に行って声を掛けたり、他の園児がしていることをただ眺めたりしながら過ごしていた。

その日の振り返りの中で捉えた園児の姿

担任の保育教諭は、記録を書きながら、遊びの様子を振り返りました。

A児は担任と一緒にいることで安心して遊び出すことができるようになった。

園児たちは、作ったチョウチョにご飯を食べさせるなど、作ったものを使って次の動きを楽しんでいた。

園児たちにとって保育室は安心して生活できる場になった。もう少し遊びの場を広げていってもよいのかもしれない。

B児、C児は、園内の環境に慣れていることから、今の環境では物足りず、作ったものを使って遊んだり身体を動かして遊んだりなど、遊びの場を広げていきたいのではないかと。

担任の保育教諭の願いと環境の構成

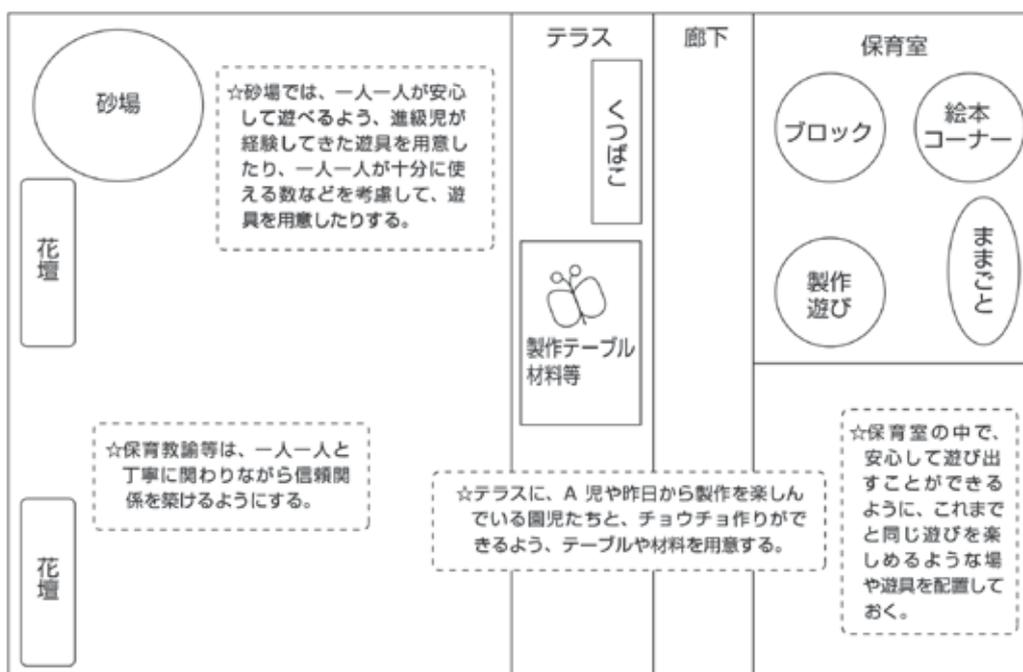
保育
教諭

一人一人が安心できる場である保育室を基盤に、やってみたいことを楽しみながら、遊びを広げていってほしい。テラスに製作材料や、テーブルを出してみよう。

室内から園庭へ遊びを広げていくために、テラスを活用する方法もある。テラスに製作できる場を用意することで、園児の動線が作る場から園庭へ広がっていくかもしれない。園庭で遊ぶ園児たちからも私（担任）の姿が見えて安心して遊べるかもしれない。

前日の記録から捉えた園児の姿を基に、遊びの場を広げていきたいと考えた担任の保育教諭は、テラスが保育室と戸外をつなげる場となることを期待し、テラスにテーブルを出し、製作する場所を作ることにしました。

翌日の環境の構成



翌日の遊びの場面

A児は登園すると、テラスに昨日のチョウチョ作りの場があることに気付き、「あ！」とつぶやく。普段はゆっくりしたペースで身支度をするが、今日は鞆をロッカーに入れるとすぐに、担任のそばに来る。

担任が、テラスで遊び始めた園児たちとチョウチョを持って会話をしていると、A児も小さな声で「やる」と担任に伝えた。担任と一緒に自分のチョウチョを作り完成すると、嬉しそうな表情でチョウチョを動かして遊んでいた。

同じ場にいたD児が「本当にお花の蜜が飲みたいんじゃない？」と言った。園庭の花壇に咲いている花を見つけたE児が「あそこにお花あったよ！」と話す。担任も「本当だ。喉が渴いたから行ってみようか？」と言うと、チョウチョを持った園児たちが花壇に向かって走り出した。A児も楽しそうな表情で一緒に動き、花壇の花一つ一つにチョウチョを近付けて蜜を飲ませるしぐさをして遊び始めた。

翌日の遊びの場面

登園したB児、C児は、身支度を終わるとすぐに砂場に走っていった。あらかじめ用意しておいた、砂場の道具（小さなシャベル・コテ・ザル・乗り物・皿や茶碗など）の中からシャベルを持ち出し、砂をすくっていると、線のように跡がつくことに気付き、その線を線路に見立てて乗り物を走らせていた。その後、砂場から砂場の外に向かって乗り物を走らせていくと、偶然土の園庭に長い線ができ、それを長い線路に見立てて、園庭中を走らせて遊ぶことを楽しんでいた。

事例から読み取れること

【園児の生活や遊びの動線を考えて、遊びの場を構成する】

テラスに製作の場を作ったことで、登園してくる園児から遊びの場が見え、自分のしたい遊びを見付けるきっかけとなりました。そのことが、園での遊びや一日の生活に期待をもつことにつながったと言えます。

また、作ったものを園庭に持ち出して遊ぶなど、テラスに作った製作遊びの場が、保育室と園庭をつなげる場となりました。

園児の生活や遊びの動線を考えながら、何をどこにどのように提示していくのか等を、一つ一つの遊具や教材、遊びの場や空間など、様々なことを関連させながら、保育教諭等が願う体験ができるよう、状況をつくり出していくことが大切です。

【園児の遊びのイメージや遊びの場が広がるような空間や場の工夫をする】

園児の周りにある様々なものは、全て教育的及び保育的価値をもった環境であると言えます。事例では、場をテラスに作ったことで、園庭の様子が目に入るようになり、実際に咲いている花を使って、遊びを広げていく姿が見られました。園児がどのように遊びを展開させていきたいのか、園児のイメージにふさわしい遊びの展開は何かなどを、保育教諭等が予想しながら、育ててほしい方向性に向かう体験ができるよう、園内にあ

様々な場や空間を活用しながら環境を構成していくことが大切です。

【園児の発達を捉え、園児の実態に応じて、ねらいが実現できるような教材や遊びを提示する】

製作遊びで提示されていたものが、簡単に作ることができるチョウチョであったことが、園児が遊びを楽しめた要因の一つであると言えます。また、砂場でも園児一人一人がそれぞれのしたいことを十分に楽しむことができるよう、数などに配慮しながら遊具が提示されていました。もし、担任の保育教諭が、「試したり工夫したりしながら遊んでほしい」という願いをもっていたら、自分なりのイメージでチョウチョを作ることができる材料や、様々な材料から園児が試しながら選んで使える材料の提示が必要となるでしょう。

また、砂場で大きな山や川などを作る中で、「友達との関わりを深めたり協力したりしながら遊んでほしい」と担任の保育教諭が願いをもっていたら、砂場に提示する遊具も異なっていたことでしょう。

保育教諭等は、園児の姿から、何を楽しんでいるのかを捉え、今必要な体験は何かを考えながらねらいを立て、ねらいが実現できるような環境を構成していくことを常に意識していくことが大切です。

【園児一人一人の実態に応じて遊びを楽しめるための環境の構成を工夫する】

新たな学級が始まる際には、園児の実態が一人一人違うことを意識していくことが大切です。これまでの園生活の経験が違う園児が在園していれば、より様々な姿が見られることでしょう。

保育室が安心できる場となっているため、保育室で遊びを楽しみたい園児、少しずつ慣れてきて自分なりに動き出し、場を広げていきたい園児、保育教諭等と共に過ごすことが楽しい園児など、園児一人一人の実態を捉えながら、個々の実態に応じて援助をしていくことが大切です。一人一人の実態が違うこと、イメージや実現させたいことが違うことなどを把握し、それぞれの園児が十分楽しみ、満足感や達成感を味わえるよう、環境を構成していきたいものです。

【園児一人一人と丁寧に関わりながら、必要なときに必要な援助ができるよう、保育教諭等が、自分の動線を意識する】

園児が安心して生活や遊びを始めるためには、担任の保育教諭との信頼関係を築いていくことが基盤となります。そのためには、保育教諭等自身が、遊んでいる園児一人一人の所に行き、言葉を掛けたり一緒に遊んだりしながら丁寧に関わっていくことが大切です。

また、信頼関係が築けると、言葉のやり取りはなくとも、保育教諭等の姿が目に入ることで、安心感をもつ園児もいるかもしれません。援助を行っていく中では、環境の一部である保育教諭等自身が自分の動線を意識し、園児たちが遊んでいる中をどのように動き、どのようなタイミングでそれぞれの園児に必要な援助を行っていくのかを、常に意識しながら教育及び保育を進めていくことがとても重要なことです。

事例9 「今日は、ドングリごはんです」・「案山子ってなあに？」

園外での活動を教育及び保育に取り入れたり、園外の環境を生かしたりしながら、園児が豊かな生活体験を得られるような環境を構成する

地域の自然や人、社会資源など、園外の環境を活用していくことは、教育及び保育を行っていく上でとても大事なことです。それは、単に園外の散歩などに出て、偶発的なことだけを待っていればその保障ができるというものではありません。意図をもって園外に出ることで、自然や人、社会資源などに、より興味や関心をもち、環境に深く関わることで、その可能性を探究していき、豊かな園児たちの学びにつながっていきます。

そのようになるためには、園児が自ら考え主体的に進められるような、そして期待がもてるような人的環境としての保育教諭等の言葉掛けや園児同士の話合いの場、物的環境等の構成が大切になります。保育教諭等が一方的に活動を進めるのではなく、園児の興味や関心に応じて環境を工夫し、園児主体の環境との出会いや活動の展開、状況の変化などを予想していきます。

【場面】 公園の花々を管理する人との出会い、そしてハーブへの興味へ

4月の初め、園内だけではなく、地域の環境との出会いを考え、園外に散歩に行くことを計画する。また、園庭には一年を通じて、諸感覚を働かせ、季節を感じ、豊かな活動につながることを願い、身近な植物を植えるなど、長期的な視点で園児の体験につながることを考え、計画的に環境を構成している。

担任は、活動の見通しや担任の願いとして「散歩を通して体験してほしいこと」などを思い浮かべながら指導計画を立てた。その上で、散歩に行く道のりで、季節の植物や地域のお店などにも気付くよう、声を掛けることを大事にしたいと考えていた。

散歩先で公園の花々を管理する人と出会った。その方との交流の中で、大切に育てているハーブをいただいた。そのことをきっかけに、園児たちはハーブに興味をもった。園児たちは、園庭でもミント、ローズマリー、バジルなどのハーブを育てていることを担任から聞くと、園庭のハーブ探しをしたり、園にある図鑑でハーブを調べたりしていた。

担任は、散歩の中で園児が体験したことの大切さを感じるとともに、園児同士で興味や関心をより深めたり、園外で体験したことを生かしたりできるよう、保育室にハーブに関する本を増やすことにした。また、園児や担任が調べてきたことをファイルに入れ、皆が目にすることができるよう保育室に置いた。

園児たちは、実際にミントやローズマリー、バジルなどのハーブの香りを嗅ぎ「いい匂いがする」と話したり、「料理に入れたい」とつぶやいたりしていた。

園児たちなりに調べていくと、ハーブには様々な種類があり、中には食べられるものがあること、匂いや効能があることに気付く園児がいた。園児の興味が深まったことから、種や苗を買いに行き、水やりやお世話をする当番を決めて、自分たちでハーブを育ててみることにした。

ミント、ローズマリー、バジルなどが育ってきた頃、ハーブを使った料理の本を見ながら、どんな料理を作ってみたいか考えた。そして、自分たちで考えたハーブ料理をするためには、どんな材料が必要なのかも考えた。

【場面】製作した入れ物（バッグなど）で落ち葉やドングリ・松ぼっくり拾いを楽しむ

秋のある日、4歳児の園児たちは、散歩にいった公園で落ち葉やドングリ、小枝などがたくさん落ちていることを発見した。拾いたくなり手に取るが、たくさん持って帰ることができなかった。その後、園に帰ると、園児たちから「ドングリたくさん持って帰ってきたかったな」というつぶやきが多く聞かれた。担任も、秋の自然物を遊びに取り入れたいと考えていたこともあり、次の散歩の際には、ドングリや松ぼっくりを拾ってくるができるといいなと考えた。その日、担任は、ドングリや松ぼっくりをたくさん持って帰って来る方法を園児たちに問いかけてみた。すると園児たちは、「入れ物を持っていけばいいんじゃない?」「鞆があるといいよ」「袋とかね」と様々な考えを話した。

次の散歩に出掛けるまでに、一人一人入れ物を作るようになった。担任は、園児が興味をもったものを選んで使うことができるよう、チャック式のビニール袋やペットボトルを半分に切った容器、色画用紙や不織布、牛乳パック、小さなペットボトル、肩紐にできるような紐や紙テープなど、様々な素材や材料を準備した。園児たちは思い思いに入れ物を作り、それを持って期待を膨らませながら散歩に出掛けた。

そして公園でドングリや松ぼっくりをたくさん拾い、園に持って帰ってきた。

担任は遊びの中で拾ってきたものを使うことができるように処置して、園児たちが使いやすいように保育室に提示しておいた。すると、ままごとをして遊んでいた園児が、ドングリをご飯に見立て「今日はドングリごはんです」と話しながら料理を始めた。製作遊びを楽しんでいた園児は、折り紙で折ったメダルの真ん中にドングリを貼り付け、ドングリメダルを作って遊んでいた。それぞれの園児が自分の遊びの中に自然物を取り入れながら遊ぶことを楽しんでいる様子であった。

その後、季節を感じられるよう、秋の自然物を使いながら学級の皆に体験してほしい製作遊びとして担任が提示した、「ドングリや松ぼっくり、小枝などを使った写真立て作り」や「ドングリと紙粘土で作るドングリケーキ」「松ぼっくり人形作り」などの製作遊びも楽しんだ。

【場面】園児の遊びが充実するよう、園外の場所や自然を生かす

5歳児の学級では、折り紙や色画用紙、輪ゴムや割り箸、テープなど普段から園児が作って遊ぶことができるよう、様々な材料を保育室に提示している。

園児たちは紙飛行機を作ることを楽しんでいた。折り紙で作った紙飛行機や色画用紙で作った硬くて少し大きな紙飛行機など、様々な物を作っている。また、他の園児たちは、割り箸と輪ゴムを使って装置(割り箸鉄砲)を作り、紙で作ったブーメランのようなものを飛ばすことを楽しんでいた。

紙飛行機や割り箸鉄砲がいくつかできあがると、園児たちは、飛ばすことに夢中になり、床にビニールテープを貼ってスタートラインを作り、どこまで飛ぶのかを友達と競い合ったり、自分なりに飛ばし方を工夫したりしながら遊ぶ姿が見られた。

繰り返し遊ぶうちに園児たちは試行錯誤しながら、よく飛ぶものを作るようになっていった。そのような中で、園児たちから「広い場所でどのくらい長く飛ぶのかやってみ

たい」「風が吹いている広い場所ならもっと飛ぶよね」などという声上がるようになった。

担任は、散歩に行った先の広い広場のある公園ならば、園児たちの思いが実現できるのではないかと考えた。また、より試したり工夫したりすることにつながっていくことも期待した。そして、今度園外に行く際に、作った飛行機や割り箸鉄砲などを持って行くことを園児たちに提案した。そのことをきっかけに、他の園児たちからも「作ってみたい」という声上がり、紙飛行機などを作る園児が増えた。また、風が吹いていることを予想した園児は、風車のようなものを作ったり、簡単に作ることができる凧のようなものを作ったりしていた。

その後、作ったものを持って、公園に行き試してみた。園児たちは、周囲を気にすることなく思い切り飛ばしたり、風に乗って飛んでいくことを楽しんだりしていた。また、風に向かって飛ばすのか、風と同じ方向に飛ばすのかなどに興味をもつ園児の姿も見られ、繰り返し試しながら遊ぶことを楽しんでいた。

【場面】 地域の方との関わりを、教育及び保育に生かす

園では毎年、園庭の一角にプランターを並べ、そこで5歳児が田植えをして稲を育てている。10月の終わり頃、稲穂が実り始めた。5歳児の園児たちは、自分たちで育てたお米ができてきたことをとても喜んでいて。しかし、スズメやカラスがその稲穂を食べてしまうようになり、園児たちは「お米がなくなっちゃう」と、悲しそうな様子であった。

園には、地域の方が定期的に来園し、避難訓練を一緒に行ったり様々な園行事に参加したりしている。また、田植えの際には、植える稲の苗を届けてくれたり、その後の稲の様子を見に来てくれたりしていた。

ある日、園児が園庭で遊んでいるときに地域の方が来ると、園児たちは「カラスがお米を食べちゃうんだよ」「どうしたらいいの?」と悲しそうに話した。すると、地域の方は「案山子作りなよ、知ってる?」と園児に伝えた。さらに「案山子があるとカラスやスズメが怖がって、近くには来ないんだよ」と教えてくれた。しかし、園の周りに田んぼがある地域ではないため、園児たちは案山子を知らなかった。園児はすぐに担任に「案山子ってなあに?」と聞きに来た。

その日の夕方、担任は、様々な図鑑の中から田んぼの風景が載っているページを調べたり、田んぼの風景の写真を印刷したりして保育室に掲示しておいた。

次の日、登園してきた園児は掲示していたものを見ながら、「これが案山子ね」「おばあちゃん家に行ったときにあった!」「この間、芋掘り遠足に行ったときバスから見えたよね」などと田んぼの様子を見ながら話していた。

すると、「これ作ろうよ!」と数名の園児たちが早速、案山子を作り始めた。「頭は何で作るのか」「体に使える棒はないのか」「手はどうするのか」「顔は怒っている顔にしよう」などと話しながら、園児たちは必要な材料を探して集めたり、材料を組み立ててみたりしている。また、自分たちがイメージした材料がないかを担任に相談に来ることもあった。

担任は、前日のうちに、園児たちが案山子を作りたくなるだろうと予想し、どのようなものがあれば案山子が作れるのかを考えていた。また、使えそうな材料を準備していたこともあり、園児たちが相談に来ると「こんな材料もあるよ」と、園児たちが思いついたことを認めながら、状況に応じて園児たちのイメージに合うものを提案し、一緒に案山子作りを進めていった。

案山子ができあがると、園児たちはすぐにプランターの田んぼに立てに行く。「これで安心だね」「今度　　さん（地域の方）来たら、教えてくれてありがとうって言わないとね」「そういえば夏にトマトも食べられちゃったから、今度トマト育てるときは案山子立てようよ」などと思いつきに伝え合う姿が見られた。

事例から読み取れること

【物的な環境、人的な環境など、地域にある様々な環境を生かし、教育及び保育に取り入れる】

○園外では、様々なものに偶然出会ったり発見したりすることが多くあるでしょう。園児の体験はつながっているものです。園外での体験をその場での出来事に留めてしまうのではなく、園児の興味や関心に応じて、園内の環境にも取り入れながら、遊びに生かしていくことも大切です。

長期的に見通しをもち、園内での体験と園外での体験がつながっていくような環境を整えていくことも大切であると言えます。園外での体験と園内での体験が関連することにより、園児たちが地域の環境に興味をもつことや園内での遊びが充実することなど、相互の充実につながっていきます。

○地域の方も大切な人的環境です。地域の方との交流をする中で、園児が新たなことに気付いたり、新しい発見をしたりすることもあります。地域には様々な分野に詳しい人材がたくさん存在していることも多いでしょう。地域の人材を活用しながら、そこから得られた園児の興味や関心が教育及び保育につながっていくよう、環境を構成していくことが大切です。

【自然や人、社会資源等に、興味や関心をもって関わることで、園児たちの体験につながることを意識する】

○園外に出る園外保育や散歩などは、園内では体験できないことを体験できるよい機会となります。そのためにも保育教諭等が、地域の中のどこに何があるのかなどを把握しておくことが重要です。保育教諭等自身が園の周辺環境に興味や関心をもつことにより、ただ目的地に向かうだけでなく、道の途中にある四季を感じられる自然に気付いたり地域の方との触れ合いにつながったりしていくこともあるでしょう。様々な体験ができる園外保育や散歩は、保育教諭等が園児に体験してほしいことを意識しながら計画していくことにより、より充実したものとなっていきます。

【園外の環境のもつ教育的及び保育的価値を考え、園児の体験が豊かになるようにする】

○室内や園庭の環境のみでなく、園がある地域に存在する様々な施設や場所なども教育及び保育の環境の一つです。その環境と関わることによって、園児たちが何を体験できるのかを考えたり、より深い体験につながるよう園外の環境のもつ教育的及び保育的価値を考えたりしながら、必要に応じて活用していくことにより、園児の体験はより豊かなものになっていきます。

事例 10「あのとき作った、動く車を作ろうよ」

(作って遊ぶことを楽しむ時期～試したり工夫したりすることを楽しむようになる時期)

教材のもつ教育的及び保育的な価値と園児の実態とのバランスを考慮しながら 教材を提示する

教育及び保育の環境は、保育教諭等が園児に体験してほしいことを願って構成していくものです。しかし、保育教諭等の意図ばかりが強調され、保育教諭等の一方的な教育及び保育の展開にならないよう配慮が必要です。園児と共に環境を創造していくということを意識したり、園児の興味や発達に応じて環境の構成を工夫したりしていくことが重要です。

保育教諭等は、常に遊びの中で「園児が何を楽しんでいるのか？何を体験しているのか？」また、「教材が園児の発達段階に応じていないと感じたら、どうするとよいのか？」などを考え、教育及び保育を実践していくことにより『園児の理解に基づいた環境の構成』につながっていきます。

事例の概要

5歳児6月、園児の遊びの様子から「作った車を動かしたい」という園児の思いを受け、ゴムタイヤを提示してみた。しかし、動く車を作って遊ぶ園児の姿から、担任は「この環境や教材が今の園児の発達の状況にふさわしいのか」と疑問に感じ、しばらくゴムタイヤはしまっておくことにした。10月後半になり、担任は園児の姿(人との関わりや試行錯誤している様子など)を見ながら、時を経て、再びゴムタイヤを提示してみた。

遊びの様子・6月

空き箱・セロハンテープ・はさみ・色紙などが製作ワゴンにあり、すぐ近くに製作ができるようにテーブルが用意されている。

保育室内では園児たちが板積み木で道路を作って遊んでいる。A児、B児は、空き箱で車を作っていた。その車を押しながら、板積み木を道路に見立てて二人で運転しているような会話をしながら、遊んでいた。

A児は担任に、「先生、本当に走る車にしたいからタイヤが欲しいんだよ」とつぶやき、B児は、「タイヤ」という言葉を聞いて「そうだね。本当のタイヤみたいの、付けたいね」とA児に話した。

担任は、梅雨時期で室内での遊びが続いていたので、『試したり、考えたりして遊んでほしい』と願っていたこともあり、ゴムタイヤとストロー、竹ヒゴを提示することにした。担任は材料を出してくると、空き箱にストローを付け、ストローに竹ヒゴを入れて、その両端にゴムタイヤを付けるとタイヤが回ることを伝え、園児と一緒に作ってみた。

タイヤを付けると、A児、B児は手で押すとスーッと動く空き箱の車を見て喜び、何度も走らせていた。その姿を見て担任は、『明日は興味をもって車を作りに来る園児が他にもいるかもしれないから、ゴムタイヤなどを多めに用意しておこう。』『明日は、自分で考えたり、試したり工夫したりして遊ぶ楽しさを感じられることをねらいにしていこう。』と園児の姿を予想したり願いをもったりした。そして、車の遊びが十分楽しめるように、保育室・廊下など広いスペースが保障できるように、室内を整理しておいた。

次の日、担任の予想通り、車に興味をもった園児が動く車を作り始めた。タイヤで動く車を作り始めたC児は、板積み木の下に四角い積み木を置き、坂道を作って走らせていた。すると偶然、傾斜で勢いがつき、車が床に跳ねてジャンプした。C児は仲間になったD児、E児と共に、車が跳ねる様子を繰り返し楽しんでいった。園児たちは、傾斜で生まれる勢いで車が床にぶつかり、ジャンプすることが面白いと感じている様子で、車を走らせることよりも、斜面の上から車を勢いよく手で押し、勢いがつくとどうなるか、ということに興味をもつ様子が見られた。しかし、何度も手で力いっぱい押していたため、作った車が壊れてしまった。

一方、A児とB児は、車を走らせることよりも、作った車に人形を乗せたいと考え、乳酸菌飲料の容器にスチロール球を付けて人形を作って車に乗せて遊び始めた。人形を作ったことがきっかけとなり、以前に体験した立体の人形作りを思い出した様子で、容器に自分の好きな色紙を巻き、洋服を着せるなど、人形を作ることを楽しむ姿に変わっていった。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の願い

園児たちは、車を走らせて遊ぶ中で、傾斜で勢いがつき車がジャンプする様子を見て楽しんでいった。また、A児、B児は車に人形を乗せて走らせることより、人形を作ること自体を楽しんでいた。

車を作ったり坂道を作って走らせたりして遊ぶ中で、ゴムタイヤの特性を生かしながら、車が走るスピードの変化や勢いよく車が走る面白さを感じながら遊ぶ園児の姿を予想していたが、園児の姿から、ゴムタイヤのもつ特性を生かしながら、試したり工夫したりする面白さの体験につながっていたと言えるのだろうか？

○これまでの経験の中で、ゴムタイヤを使って走る面白さにつながるような「物が転がる面白さ」自体を味わう体験や、自分たちで工夫しながら遊ぶことを楽しむ体験をどれくらいしていたのだろうか。



保育
教諭

ゴムタイヤは一旦様子を見て、ビー玉など、転がることで動きが生まれる物で遊ぶ楽しさを十分体験してから、またゴムタイヤを遊びに取り入れてもよいのかもしれない。

明日は、「転がる面白さを味わう」ことをねらいにしてみよう。

翌日の遊びの様子

担任は、ビー玉、《B》の形をしたブロック、板積み木、木片、段ボールを小さく切ったものなどを用意しておいた。

ビー玉に興味をもったC児、D児、E児は「前に《B》の形をしたブロックをつなげてビー玉のコースを作ったよね。また作ろうかな」と話しながら一緒にビー玉を転がす長いコースを作って遊び始めた。

遊びを十分に楽しむ姿が見られ、より試したり工夫したりしながら転がる楽しさを味わってほしいと思った担任は、「今度は板でもコースを作れるよ」と近くに置いてあった板積み木を斜めにしてビー玉を転がしてみた。すると、「あ、そうだ。これで難しいコースができるかもしれない」と言いながら、3人は、板積み木に木片を並べて置き、ビー玉を転がすコースを作り始めた。その後も、次々と板に木片や段ボールを貼り、ビー玉が転がる様子を見ては、木片を動かしたり、ビー玉が板から落ちないように縁に段ボールを貼ったりしていった。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の願い

自分でビー玉転がしのコースを作ることで、ビー玉の動きを予測したり、試したりしながら、楽しんで遊ぶ様子が見られた。

保育教諭

一つの板積み木の上で3人の園児がそれぞれに自分の思い付いたことを伝えたり、試したりしながら、コースを作ることができた。簡単にできること、予想しやすいこと、木片・段ボール・牛乳パックなど様々な素材を取り入れたことなどが、園児の発達の状況に合っていたのではないかと感じた。

ビー玉転がしの遊びは、コースの長さや傾斜の高さを変えるなどしながら、1学期の間、楽しんでいました。また、9月の初旬には牛乳パックの船を作って水に浮かべて遊んだり、ゴムの動力を使って動く船作りを楽しんだりしました。これらの経験をしたことにより、自分で作ったもので遊ぶ面白さを味わい、製作遊びの際には、自分が考えたように作るために試行錯誤している園児の姿が多く見られるようになってきました。

遊びの様子・10月

10月後半、運動会が終わり、友達と考えを伝え合って遊ぶ姿が見られるようになってきた。担任は、「もうすぐ未就園児の会でミニ運動会があるんだけど、何か年長さんが手伝えることはないかな」と園児たちに問い掛けてみた。園児からは「小さいお友達が頑張るからお土産をあげるのはいかがかな」という声があがった。

するとA児が、「あのとき作った、動く車を作ろうよ。小さい子も動かせるんじゃない？でも、まだ作れないから僕たちが作ってあげたい」と話し出した。担任は、A児が今まで経験したことを思い出しながら友達に提案したことや、小さい子も遊びやすいと考えたことなどを嬉しく思った。他にも、蛇腹折りの手が動くペープサートや牛乳パックのパクパク人形など、今まで作って遊んできた物が次々に提案された。担任は、園児たちの思いを受け止めながら相談し、自分が作りたいお土産を作ることにした。

数日後、製作テーブルに「ゴムタイヤ」「竹ヒゴ」「ストロー」を置くとともに、未就園児でも扱いやすいような小さめの空き箱を用意しておいた。また、車の動きが試せるよう、保育室・廊下など広いスペースが確保できるように、場を整理しておいた。6月に一度、

車を作った経験があるA児たちは、すぐにお土産用の車を作り始めた。作ったことがない友達にも作り方を教える姿も見られた。A児は、作りながら「自分の車も作っておこう」と自分の分も作り始めた。B児、C児たちも、お土産の車を作り終わると、次々に自分の車を作り始めた。

園児たちは、作った自分の車を板積み木で作った坂道で繰り返し走らせながら遊び始めた。車が走っていく様子を見て、どこまで進むか見届けたり、どちらが長く走っているかなどを友達と競い合ったり、「もっと長く走るのはどうしたらいいのか」や「どのようにしたら早く走るのか」などを考えたり、車や坂道を作り替えたりしながら繰り返し試している姿が見られた。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の願い

A児は6月にゴムタイヤで車を作ったことを思い出して提案したのだろう。

「小さい子も動かせるんじゃない？」という言葉から、未就園児にとっても簡単に動かせると予想して提案したのではないか。

6月は、車を押すことで勢いがつく楽しさを味わっていたが、今回は違っていた。

10月中旬頃までに、試行錯誤しながら作って遊ぶ体験を積み重ねてきたことで、「どこまで進むか」を見届けたり「どちらが長く走っているか」などに興味をもったりするなど、自分で作った物で試したり考えたりしながら遊ぶようになってきた。



保育
教諭

6月にそのままゴムタイヤを提示しておくより、一度片付けて、再度、園児の実態に応じて提示したことはよかったのかもしれない。同じ教材でも提示する時期によって園児が体験できることも変わってくるのがわかった。

事例から読み取れること

【園児の遊びを丁寧に見ながら、園児の楽しんでいることを読み取る】

その日の教育及び保育を振り返り「遊びを通して園児は何を楽しんでいたのか」を考えていくことが大切です。また、その「楽しさ」を通して、どのようなことを体験しているのかを考えていくことも重要です。園児の遊びは、保育教諭等の予想通りに展開されないことがあります。むしろ、園児の発想や偶然の出来事から、予想外の遊びに展開することもあります。様々な場面を思い返しながら「なぜ楽しめたのか」「楽しめなかったのはなぜか」などと、それぞれの要因を考えていくことが遊びに必要な環境を考えていく上で、とても大切です。

【保育教諭等の意図と、園児の発達の状況や興味や関心とのバランスを考える】

○この事例では、担任の保育教諭が「試したり工夫したりしながら遊ぶ面白さを感じてほしい」という願いをもち環境を構成しましたが、園児は、タイヤで進む面白さを感じながら試したり工夫したりすることより、「傾斜で生まれる勢いで車がジャンプすることが面白い」と感じている様子が見られました。その際、担任の保育教諭は、「この教材

(ゴムタイヤ)が今、園児の実態に応じた体験をすることに適しているのか」また、「教材のもつ特性や教育的及び保育的な価値が十分に生かされ、園児の体験につながっているのだろうか」などと考え、環境の構成を工夫しました。保育教諭等の意図のみを一方的に押し付けるのではなく、園児が発見した面白さや発達の実態に、よりふさわしい環境の構成を考えていくことが大切であると言えます。

【教材研究を行い、教材のもつ教育的及び保育的価値を意識しながら、園児の実態に応じて環境を変化させていく】

○園児の要求に応じて教材を提示してみたものの、遊びの中でその特性を生かしきれない場合もあります。「提示するのは、まだ早かったのかもかもしれない」、「少し簡単すぎて園児には必要感がなさそうだ」などと感じることもあるでしょう。実態に合っていない様子が見られたときには、一旦しまってみることも必要です。

一つ一つの教材が園児にとって意味のあるものになっているのかを考え、精選していくことが、園児の発達に応じた教材の準備につながり、園児の遊びに大きく関わってきます。常に同じ教材を提示するだけの環境の構成ではなく、園児の実態に応じて環境を変化させていくことが大切です。

園児の興味や関心に応じて「必要な教材をすぐに出せる」こと、「教材をタイミングよく提示していくこと」は、遠回りのようですが日々の保育を丁寧に振り返り、園児の理解を深めていく中で得られるようになる力です。保育教諭等自身が教材の特性を理解したり、園児の興味や関心に応じてふさわしい教材を提示したりしていけるよう、教材研究を重ねていくことが必要です。

事例 11 「ただいま」「おかえり」

(集中して遊びに取り組む場と家庭的な雰囲気の中でくつろぐ場の配置の工夫)

一日を通した生活の流れを意識し、園児の実態に応じた環境を構成する

幼保連携型認定こども園には、4時間程度の教育課程に係る教育時間終了後に降園する園児もいれば、8時間以上園で過ごす園児もあり、家庭環境や保護者の就労などの生活形態により園児の生活のリズムが異なっています。教育課程に係る教育時間前後の教育及び保育だからこそ、園児一人一人の園生活を見通した上で、ただ預かるだけでなく、教育的な意図と家庭的な雰囲気の中で落ち着いて過ごせるような配慮の下、活動や休息、緊張感や解放感などの調和を図っていく必要があります。

園児と保護者との家庭での過ごし方も視野に入れ、連携しながら生活全体を考慮し、園の教育及び保育を考えていくことが必要です。

早朝の園生活の中で

早朝利用する園児に対して、配慮していることは以下の通りです。

家でももう少しゆっくりしたかったという思いや、保護者と過ごしたいという園児の気持ち、また、保護者の就労時間に間に合わないために自分のペースで身支度などができずに登園することから、気持ちが切り替わっていない園児などもあるため、園児一人一人の姿を丁寧に受け止めています。

園児が安心してゆっくり過ごせることに配慮して『くつろぎスペース』の環境を構成しました。部屋の一角にマットを敷き、大型クッション、ブランケット等を準備しています。少人数での対話型・参加型の絵本の読み聞かせや、園児一人一人の気持ちや要求に応じた環境が、園児の安定につながっていきます。

教育課程に係る教育時間終了後の教育及び保育の中で

教育課程に係る教育時間終了後の教育及び保育を受ける園児の中には、9時頃に登園し夕方早くに帰る園児から、早朝から夜間までいる園児などが共に生活をしています。園児の年齢や生活のリズムなど、園児一人一人の心もちや心身の疲労などにも配慮していくことが大切です。まだまだ元気で遊ぶ意欲がある園児には、集中して遊びに取り組んだり、友達と関わりをもったり心身をいっぱいに使って遊んだりする場が必要です。また、長時間の在園となる夕方近くや一緒に遊んでいた園児が降園していく時間などには、安心して保護者の迎えを待てるような、家庭的で温かい雰囲気の空間で個々のペースで楽しめたり、くつろいで過ごしたりできる場が必要です。環境の構成を、その場でのねらいや配慮すべき事項に合わせ意図的にかつ柔軟に行うことが大切です。

ほっと安心できるように、教育課程に係る教育時間終了後の教育及び保育でも担任制を取り、決まった部屋で過ごしています。「ただいま～」「おかえり」で始まり、その部屋や担任への愛着とともに、安心して家庭的に過ごせるように、園児一人一人が自分のペースでゆったりと過ごす場になることを意図しています。家庭と同じように座って過ごすことができるような敷物や寝転がれるクッション等、家庭的な雰囲気の中で過ごすことができるよう環境を構成しています。教材や遊具の中には、ボードゲームや人形遊びなど、園児たちの興味のあるものも環境として準備しています。

また、園での生活に慣れてくる2学期以降は、遊びに行きたい場所（部屋）にも自由に行けるように、「お出かけボード」に自分の写真付き名札を地図上の場所に貼り、行き来できるようにしています。他の部屋で、他の園児との自由な関わりや異なった遊び、異年齢での関わり、自主的なお手伝い活動なども多く見られます。

夕方の園生活の中で

17時以降は利用人数も少なくなっていき、一緒に遊んでいた友達が徐々に帰って行く時間になります。園児が降園する際、保護者への引渡しに保育教諭等の意識や時間がとられ過ぎてしまうと、保育室に残っている園児が不安になることもあります。そのため、環境の在り方や保育教諭等の関わり方の配慮、保育教諭等同士の連携が必要となります。

そこで、夕方の少人数で遊べる教材・遊具を用意しました。ボードゲームや将棋、カードゲームなど、少人数だから遊べる遊びや、いつもと同じ仲間関係ではなくても、その日に一緒に過ごしている園児同士で楽しめるような遊びを提示することで、一緒に過ごす園児同士のつながりを強くし、心理的な距離を短くしていきました。また、家族のように、年長児が年下の園児に遊び方を伝えるなどの関係性も見られるようになりました。

これらのように、園児の実態に応じ、早朝の園生活では「気持ちを整える」をテーマとして、個の遊びを重視した環境を構成し、教育課程に係る教育時間に向けて「ゆったり、気持ちを切り替えられる時間・環境の構成」を意識しています。また、夕方の園生活では「安心とくつろぎ」をテーマとして、活動量の多い遊びよりも、座って行える遊びや園児や保育教諭等と一日を振り返る会話などを楽しむ「今日一日をおさめて明日に向けていく時間・環境の構成」を意識しています。一日の園生活の中で変化する園児の実態を的確に捉え、園内の保育教諭等が園児の理解や教育及び保育の展開を共通に理解しながら、環境を構成しています。

事例から読み取れること

【早朝の園生活では】

早朝の園児の姿から考えると、特に「くつろぎスペース」の確保が重要と考えられます。この時間での過ごし方が、教育課程に係る教育時間までの気持ちを切り替える時間となっていました。入園当初泣いて登園していた園児も「くつろぎスペース」を充実したことにより、気持ちを切り替えて一日が始まり、一日の園生活が安定し充実することができるようになってきました。

【教育課程に係る教育時間終了後の教育及び保育では】

教育課程に係る教育時間終了後の教育及び保育では、園児一人一人の興味や関心に即した遊びに取り組みめるような保育室の環境や遊びの展開、必要に応じて再構成がしやすいことなどに配慮し、環境の構成をするようにしています。保育教諭等も重要な人的環境となります。時間的なゆとりをもって、柔軟に園児に関わっていくことが大切です。園児たちが、自分のペースでやりたい遊びに取り組みめるよう、園児の遊びの状況に応じて、環境を再構成したり、時間を調整したりしながら、一人一人の興味や関心のある遊びを広げ、深めていくことで、今日から明日への遊びや活動の連続性が生まれるようになっていくことが期待されます。

園児一人一人が、自分の過ごしたい場所で遊ぶことができることで安心感が生まれ、他学級の園児や異年齢の園児との関わりやつながりをもつことができ、自然と異年齢の園児同士が関わる姿などが見られるようになりました。

【夕方の園生活では】

夕方からの園生活については、家庭に帰ってからの園児の生活のリズムも考慮し、「ゆったりと落ち着いた時間」を意識した遊びの展開と環境の構成を大切にしています。日中から夕方まで集中して遊びに取り組んだり夢中になって遊んだりする時間が長時間になると、園児は疲れてしまい、夕食を食べずに就寝してしまうことなどがあります。園児一人一人の一日の生活のリズムが整えられるよう、休憩・休息も入れ、保護者との密な連携を図りながら、園児にとって望ましい生活が展開できるようにすることが大切です。

【一日の園生活における園児の実態を捉え、園児の一日の自然な生活の流れをつくり出す】

「この時間だからこの環境」と、時間の区切りのみで環境を決めてしまうのではなく、園児の生活リズムや、時間ごとに見られる園児の実態から環境の在り方を考え、それぞれの時間での園児の生活や遊びが充実していくことが大切です。教育課程に係る教育時間での遊びに配慮した上で、それ以外の園生活の環境の構成について工夫していくことも必要です。園児の過ごす場や担当の保育教諭等が替わる場合などは、保育教諭等の間で情報交換を行うなど、緊密な連携も必要となります。教育課程に係る教育時間以外の様々な園児の姿を、教育課程に係る教育時間を担当する学級担任とも共有し、連携を図りながら、園児一人一人の育ちを保障できる環境の構成の在り方を日々模索する必要があります。その工夫が園児の心の安定にもつながっていくと言えるでしょう。

事例 12 「飛び出す絵本、明日作ろうね」

(園児なりに一日を通した生活の見通しがもてるようになってきた時期)

教育課程に係る教育時間後の遊びと、次の日の教育課程に係る教育時間の遊びが つながるよう、提示する教材を工夫する

この事例では、教育課程に係る教育時間の教育及び保育を『教育時間』、
教育課程に係る教育時間終了後の教育及び保育を『午後の教育及び保育』と表記します。

在園時間が異なる園児が共に過ごす状況の中で、一日の時間の移り変わりに伴い、過ごす
集団の規模や質、場、関わる保育教諭等などが変わり、園児を取り巻く人や物、場所といっ
た環境の変化も見られます。遊びの内容もそれと同時に変化していき、保育教諭等は一日を
通した教育及び保育の展開を考えて環境を構成していくことが大切になります。

午後の教育及び保育では、教育時間とは人間関係も変化し、遊ぶ保育室、そこに提示され
ている「もの」などが異なることもあるでしょう。しかし、どの時間帯であっても園児にと
って遊びや生活が安定し、遊びの内容や質は違って楽しめることが大切です。午後の教育
及び保育の中で提示した、一人でもじっくりと遊べることを意識した教材が、翌日の教育時
間につながっていくこともあります。

午後の教育及び保育における園児の遊びの様子

5歳児が仕掛け絵本を作り、読んで遊んでいた。4歳児のA児は、自分も仕掛けがある
絵本を作りたいと担当の保育教諭に訴えた。担当の保育教諭は、画用紙を二つ折りに
した画用紙の真ん中に《コの字》型の切れ目を入れ、画用紙を開いて《コの字》の所に紙
を貼ると飛び出す絵本のように見えることを提案してみた。

遊びから捉えた園児の姿と午後の教育及び保育を担当する保育教諭の願い

以前に、1枚ずつの紙を重ねてテープで留めて絵本にする遊びを体験しているが、《コ
の字》型に切込みを入れることや、そこに貼る紙の大きさを考えることなど、様々な工
夫が必要なことから、A児が一人で絵本を製作することは少し難しいのではないかと
感じている。

○しかし、仕掛け絵本に魅力を感じ、真似て作りたいというA児の気持ちも大切に
していきたい。

午後のゆったりとした時間を利用して担当の保育教諭が丁寧に関わりながら、一人で
作ってみることに挑戦することもよい体験になるかもしれない。

5歳児に作り方を教えてもらうのも、異年齢の園児がつながり、お互いにとってよい
機会になるかもしれない。

園児の理解を基にした環境の構成



保育
教諭

- A児でも絵本を作ることができるような、紙のサイズや切込みの具合を考えて、見本
となる「飛び出す絵本」をあらかじめ作って置いておくことにしよう。
- 5歳児にも作り方を教えてもらうきっかけ作りをしてみよう。

午後の教育及び保育担当の保育教諭は、次の日、A児が絵本を自分で作って遊ぶことができるよう、必要な材料を準備しておくことにしました。また、一人で作ることが難しいところを予想し、どのように関わるとA児が絵本を作ることができるのかについても考えていました。

翌日の午後の教育及び保育における遊びの様子

A児は見本を見ながら飛び出す絵本を作り始めましたが、切込みの深さが足りなかったり、紙を貼っても飛び出すように見えなかったり、貼る紙の大きさが合わずに上手くいかなかったりする姿が見られた。担当の保育教諭が「どうやって切ったらうまくできるかな」などとつぶやきながら一緒に作っていると、昨日絵本作りをしていた5歳児が近くに来て「こっちを切るんだよ」と、担当の保育教諭と共にA児に絵本の作り方を伝えた。

担当の保育教諭も丁寧に関わりながら、A児は切込みの深さを調整し、切込みを入れたり紙を貼ったりすると、上手くロケットが飛び出すようになった。「できた！できた！」とA児が喜んでいると、その姿に気付いた4歳児のB児が、「何を作ったの？」と興味を示し、自分も作ってみたいと言い出した。しかし、その日は降園する時間になってしまったので、A児はB児に「明日、一緒に飛び出す絵本を作ってみよう」と伝えた。

保育
教諭

午後の教育及び保育担当の保育教諭は、教育時間に4歳児学級を担当している保育教諭にその旨を説明し、翌日、教育時間の中で遊びが始められるよう、用意していた教材を担当に分け、A児が取り組んでいた姿やA児とB児のやり取り、A児が悩みながら製作をしていたことなどを伝えておきました。

4歳児学級担任の保育教諭の思い

保育
教諭

A児は、絵本を自分で作れたことが自信につながっただろう。B児に教えることで更に自信をもてるかもしれない。A児とB児は、友達のいるよさを感じたり関わって遊ぶ楽しさを感じたりすることにもつながるかもしれない。



4歳児学級担任の保育教諭は、A児自身の育ちや二人の関わりが深まることなどを期待して、次の日の教育時間に、飛び出す絵本を作ることができるような材料を提示したり遊びを提案したりすることにしました。

翌日の教育時間の遊びの様子

翌朝、登園してきたB児は嬉しそうに担任に昨日の話を伝えた。担任は「〇〇先生からそのことは聞いていたよ。先生も作ったことがないからA君に教えてもらって作ってみよう」と言い、材料のある場所を示した。

その後、A児が登園してくるとB児は待ち構えていたように「昨日の飛び出す絵本の作り方教えてほしいの」と誘い、自分から作り方を聞いた。A児は、「僕が切込みのコツを教えてあげるよ」などと言ったり、自分が苦労したところや昨日5歳児から教えてもらったことと同じことなどをB児に伝えたりしながら、一緒に「飛び出す絵本」を作り出した。できあがると、自分たちで即興のストーリーを作って「飛び出す絵本が完成したよ」と喜ぶ姿が見られた。そして二人で「〇〇先生(午後の教育及び保育担当の保育教諭)に見せよう」と話していた。その様子を見て、製作コーナーで遊んでいた他児が「なにになに?」と関心を示すと、今度は、A児とB児が二人で他児に飛び出す絵本の作り方を伝える姿が見られた。

その日の午後の教育及び保育では、A児とB児が担当の保育教諭に絵本を作れたことを伝える姿が見られた。そして、「続きの話作ろう」と誘い合い、二人で一緒に絵本の続きのストーリーを考えながら、引き続き飛び出す絵本を作って遊ぶ姿が見られた。

事例から読み取れること

【時間帯ごとの園児の実態に応じて、遊びの場や物の提示の仕方を工夫する】

一日を通して変化していく様々な時間の中で、どの時間においても、園児が遊びを十分に楽しんだり、満足感を味わったりすることが可能となるような環境を構成していくことが大切です。園児がやってみたいと思える遊びができるよう、配慮しながら環境を構成していくようにしましょう。

○降園時間が様々な午後の教育及び保育では、友達と共通なイメージをもちながら遊びを進めていくことよりも、じっくりと自分のペースで取り組める遊びや、自分で考えて進められる遊びの方が、落ち着いて遊ぶ姿が見られることもあります。そのような遊びを保育教諭等から提案したり、その遊びに適した教材や遊びの場を構成したりしていくことが大切です。

時間帯によって、遊びのねらいや指導のポイントは変化していくでしょう。「友達と一緒に」「自分のペースでじっくりと」など、その状況に応じて遊びを進めていくことができるよう、保育教諭等の援助の仕方や時間や場、空間などに配慮し、環境を構成していくことが必要であると考えられます。

【様々な年齢で過ごす環境を遊びに生かす】

事例でA児は、5歳児が遊んでいる姿を見たことで、絵本作りに興味をもったり、自分でやってみたいという思いをもったりしました。また、5歳児が丁寧に教えてくれたことが、次の日、A児がB児に対して同じように教える姿につながったと考えられます。午後の教育及び保育は、クラス編成や人数など、過ごす環境が変化する中で、異年齢での関わりが見られたり、園児の興味がより広がったり、園児同士の関わりを深めたりする姿が見られることもあります。それぞれの時間で園児が体験できることを考え、生かしながら、必要な環境を構成し、さらに、それを教育時間につなげていくという視点も重要なことです。

【保育教諭等同士が連携し、園児一人一人の育ちや遊びをつなぐ】

○在園時間が違うことから、友達と「また遊ぼうね」と言い合っているにもかかわらず、それが昼食後なのか、午睡明けなのか、翌日なのかは違うこともあります。認定こども園では、教育時間は教育時間、教育時間後は教育時間後と、切り離してしまうのではなく、園児にとって一日の生活を通して、遊びがつながり、体験したことがつながっていくように保育教諭等同士が情報を共有していくことが重要です。

教育時間後に体験したことを教育時間にも取り入れたことにより、A児の育ちや体験したことが一日を通してつながっていきました。また、A児とB児の関係も深まっていったと言えます。そのことが可能となるよう、保育教諭等同士で園児の実態や遊びの様子を伝え合ったり、教材や遊び方を共有したりしていくとともに、そのときに、園児が何を体験していたのか、楽しんでいたことは何か実現したかったことは何かなど、園児の育ちについて共有していくことも大切であると言えます。

事例 13 「いつの間にか、みんなと同じだね」

(新入園児と移行した園児が、同じ場にいることを楽しみながら、共に学級への所属感を味わうようになる時期)

経験が異なる園児がいる 3 歳児の生活に配慮し、園児同士の自然な関わりにつながるような遊びを取り入れたり、遊びの場を構成したりする

3 歳児学級の初めの頃は、同じ学級の中に、新入園児と移行した園児が共に生活をしていきます。新入園児と移行した園児の両方が、学級としての新しい環境の中で生活を始めていく大切な時期です。この時期には、それぞれの園児の緊張感や不安感に寄り添いながら、保育教諭等は丁寧に関わっていくことが必要であると言えます。また、新入園児と移行した園児が少しずつ関わりをもつ中で、3 歳児学級として、どのような生活をしていくのかを考えていくことも必要になってきます。

初めのうちは、遊びの中での自然な関わりや、信頼できる保育教諭等を通しての関わりから、それらの体験を基に、共に安心感をもつ中で、園児同士の関わりへと変化していくことが予想されます。焦ることなく、園児の実態に応じた遊びや、やってみたいと思えるような遊びを提示し、園児たちが遊びを楽しむ中で、自然に関わりをもっていけるような環境を構成していくことが大切です。

園児の姿と環境の構成

少しずつ、簡単なルールのゲームや体操などを学級の皆で集まって行うことが楽しくなっている。

製作コーナーにカエルやウサギに見立てられるお面の型や、看護師やコックさんになりきるための帽子などを用意しておく、思い思いに使ったり、必要なものを作ったりして簡単なごっこ遊びをしている。草に見立てた段ボールの囲いや、ままごとセットなどを使い、自分が安心できる場を確保しながら好きな遊びをしている。

新入園児の遊びの様子

新入園児の A 児が、年長児のショーごっこを真似して、台に乗って踊りたいと担任に言ってきた。担任は運動用の台を持ってきて置いた。そして、他児が加わってもよいように、さらに 4 台つなげて置いておくことにした。A 児は台に乗り、担任に「ミュージックスタート」と言って曲を流すように合図を送る。

担任は「はい、分かりました。準備は OK ね」と曲を流した。A 児は皆で集まったときに行っている体操を一人で台の上で踊り始めた。学級の皆で繰り返し踊っているうちに覚え、A 児が大好きになった曲であった。すると、次々に他の場にいた同じ学級の園児や他の遊びをしていた園児たちが集まり、台の上に乗って一緒に体操を踊り始めた。また、繰り返しのフレーズを歌い出す園児もいた。

移行した園児の遊びの様子

3歳児学級へ移行したB児とC児は、二人でままごとをすることが好きで、他の園児を仲間に入れることに抵抗がある。少しでもままごとセットの近くに他児が近付くと「あっちへ行って」などと他児を寄せ付けない雰囲気を出し、二人だけで遊びたがっていた。しかし、A児が踊っている曲が流れると、体操をしているA児たちの方をじっと見つめていた。

遊びから捉えた園児の気持ちや担任の保育教諭の願い

移行し様々な環境が変化した中で、B児やC児は昨年度の関係性から、一緒にいることで安心感をもち安定している。「前からの友達」に固執していた二人であるが、4月からの園生活で新しい園児と共に、担任の保育教諭や同じ学級の園児たちと皆で一緒に遊んだり過ごしたりなど、楽しいことを体験している。

B児とC児はA児の様子をじっと見ているが、A児のしていた遊びは以前、「学級の皆でして楽しかった」という体験のある遊びであったため、参加したいと思っているのだろうか。



保育
教諭

今後、担任の保育教諭や友達と一緒に「楽しいね」と感じることができるよう活動や遊びを積み重ねていくことで、「自分は〇〇組」「あの子も〇〇組」などと、同じ学級へ所属していることを感じてほしい。また、学級の皆と一緒にすることや担任の保育教諭が提案する活動や遊びは、やってみたいと思うような興味もてるもの、楽しいものと感じてほしい。

〇入園や移行から3か月経ち、徐々に今年度の環境に慣れ、人や物、学級集団への関心が広がり、自分から関わっていく気持ちやどの園児も同じ組の友達と思える一歩になるようになってほしい。

その後の遊びの様子

しばらくするとB児は、台の方に行き体操の歌を歌い出した。担任は集まってきた全員が台の上に乗ることができるように、更に運動用の台を運び、曲が終わる頃には、10人ほどの園児が個々に歌ったり体操をしたりしながら台の上でいた。

A児が「先生、もう一回、音楽かけて」と言うと、手を止めて見ていたC児を含めた他児、ほぼ学級の全員が台の所に行き、担任と副園長をお客さんにして、歌や体操をしていた。気が付くとステージの上には、新入園児と移行した園児に関わらず、学級の園児たちが入り混じって歌や体操を楽しんでいた。

新入園児と移行した園児が、同じ場で遊びを楽しめた要因

皆で共通に楽しむことができるような遊び（体操）を学級で行っていた。

B児とC児も、皆と一緒に歌ったり体を動かして踊ったりすることが楽しいという体験があった。

思わずやりたくなるような遊び（音楽・体操）があった。

皆が参加できるよう、担任の保育教諭が運動用の台を並べて置いたり増やしたりした。

A児をはじめとする、台の上で歌ったり体操したりしている園児たちのいる「場」が、人を選ばず、誰でも出入りできる、制限がない「場」であった。

その場の雰囲気を感じ取って参加していれば、何をしてもよく、同じ場にいることが互いに嫌ではない（他児に干渉しているわけではなく、自分が好きなことを思いのままにやっている）と感じる遊びの場であった。

事例から読み取れること

【新しい生活を安定して過ごせるようにする】

○新入園児の中には、初めての集団生活を過ごす園児が多くいます。目新しさや園に通う喜びを感じ、園生活を楽しみにしている園児もいますが、保護者と離れ、家庭にはない約束や場所、人などになじめず不安を感じる園児もいます。一方で、移行した園児の中には、今までとは違い、学級にいる保育教諭等の数も減り、気持ちをすぐに察して言葉を掛けてくれるタイミングも自分の思うタイミングではないことがあることから、不安や苛立ちを感じる園児もいるかもしれません。

保育教諭等は、保育室の環境を整え、園ならではの遊具と家庭的な遊びができるものの両方を用意し、園児が自分で遊ぶことで安心できたり居場所を見つけて楽しんだりできるようにしておくことが大切であると言えます。

○3歳児学級への移行や入園してすぐの頃には、少し手を加えらるとお面になる、魔法のステッキになるなど、自分で遊びに使うものや、作ったものを使って遊びのイメージが広がるような教材なども用意し、いくつもの、いつでも、好きな色や大きさなど、自分で選択して遊ぶことができるような教材を用意しておくことも必要になると考えられます。移行した園児の遊び方を見て、新入園児が遊びを始めることもあります。園児同士を無理に近付けたり離したりするのではなく、一緒にいたい園児と一緒にいたいように見守るような姿勢も必要となるでしょう。

【同じ学級の友達と一緒に園生活を楽しめるような工夫をする】

○年度当初から、学級の皆で絵本や紙芝居を見たり、体操やダンスをしたり、歌を歌ったりしながら、皆で同じことを楽しむ体験を重ねられるようにしていくことも大切です。保育教諭等が行うことや教えてくれることは、面白い、楽しいなどと感じることができ、「先生が好き」という思いをもてるようにしていきましょう。担任の保育教諭と共に、学級の皆で楽しい体験を重ねていくことで、次第に「皆で集まると何か楽しいことが始まる」という期待感をもつ園児が増えていくことでしょう。そのことが、園児の学級への所属感や同じ学級で過ごす友達への関心にもつながっていきます。

○新年度も3か月が経つと、一緒に活動してきたことが園児の中で共有され、「あれ、楽しいよね」「前にやった体操しよう」と体験したことを言葉にしながら遊びを始める園児も出てきます。そんな毎日の積み重ねが、学級集団として一緒に行うことも楽しいという学級全体の意識になっていきます。

【学級全体での遊びと園児が自ら選んでする遊びとのバランスや循環を考える】

○学級全体で体験した遊びを、園児が自ら選んでする好きな遊びの中で再現して楽しむこともあります。学級全体での遊びが、園児が自ら選んでする遊びのきっかけになったり、園児が自ら選んでする遊びが、学級の皆と一緒に体験する遊びになったりなど、両方が循環していくことが大切です。そのことが、遊びのきっかけや遊びの広がりにつながっていくでしょう。保育教諭等は、少し先の園児の姿や遊びの展開などを予想し、見通しをもちながら願いをもち、皆と一緒にする遊びと園児が自ら選んでする遊びとのバランスなどにも配慮しながら、指導計画を立て、環境を構成していくことが大切です。

幼保連携型認定こども園における
「園児が心を寄せる環境の構成」

作成協力者（敬称略・五十音順）

安慶名 名 奈	宜野湾市立普天間第二小学校 教頭
安達 謙	認定こども園せんりひじり幼稚園・ひじりにじいる保育園 園長
入澤 里子	植草学園大学発達教育学部発達支援教育学科 教授
大澤 洋美	東京成徳短期大学幼児教育科 教授
岡林 律子	高知県教育委員会事務局幼保支援課 専門企画員
椛沢 幸苗	認定こども園中居林こども園 理事長
曾木 書代	陽だまりの丘保育園 園長
中山 昌樹	認定こども園あかみ幼稚園 理事長
濱名 浩	認定こども園立花愛の園幼稚園 園長
古川 ワカ	新宿区立四谷子ども園 園長
堀 科	東京家政大学家政学部児童学科 准教授
丸山 智子	幼保一体施設八潮すこやか園・品川区立八潮わかば幼稚園 園長
山下 文一	高知学園短期大学 副学長・幼児保育学科長・教授
湯川 秀樹	青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 教授
渡邊 英則	認定こども園ゆうゆうのもり幼保園 園長

（職名は令和4年3月現在）

なお、内閣府、文部科学省、厚生労働省においては、
島倉 千絵 内閣府子ども・子育て本部教育・保育専門職を中心に、関係者が
本資料の編集に当たりました。